

IBM Rational Developer for System z
バージョン 8.5

インストール・ガイド



IBM Rational Developer for System z
バージョン 8.5

インストール・ガイド



お願い

本書をご使用になる前に、67 ページの『IBM Rational Developer for System z 資料に関する特記事項』に記載されている全体的な情報をお読みください。

本書は、IBM Rational Developer for System z バージョン 8.5 (プログラム番号 5724-T07)、および新しい版で明記されていない限り、これ以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： GI11-8297-06

IBM Rational Developer for System z

Version 8.5

Installation Guide

発行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第1刷 2012.5

© Copyright IBM Corporation 2000, 2012.

目次

図	v
---	---

表	vii
---	-----

本書について	ix
--------	----

本書の対象読者	ix
Developer for System z についての詳細情報の入手先	ix

第 1 章 Developer for System z の概要 1

プリインストール作業	1
------------	---

第 2 章 クライアント・インストール要件 3

メディア要件	3
追加オフラインのメディア	4
ハードウェア要件およびソフトウェア要件	5
Developer for System z のクライアント前提条件	5
ハードウェア要件	5
ワークステーションの前提条件	6
オペレーティング・システム	6
開発用ホスト環境/仮想化サポート	7
ワークステーションの相互必要条件	8
TXSeries for Multiplatforms	8
DB2 for Windows	8
Web ブラウザー	9
Adobe Acrobat Reader	9
ユーザー特権の要件	9

第 3 章 インストールの計画 11

インストール方式	11
インストール・ディスクからのインストール	11
電子イメージの使用	11
電子イメージの解凍	11
ワークステーションにダウンロードされた電子イメージからのインストール	12
共用ドライブ上の電子イメージからのインストール	12
HTTP サーバー上のリポジトリからのインストール	12
フィーチャーのインストール	12
Developer for System z のフィーチャー	13

第 4 章 IBM Installation Manager 17

Installation Manager のインストール	18
Installation Manager の開始	20
アンインストールと Installation Manager	20
Installation Manager の使用	21
インストール・リポジトリ	21
Installation Manager でのリポジトリ設定	22
パッケージ・グループと共用リソース・ディレクトリ	22
パッケージ・グループ	22

共用リソース・ディレクトリ	23
既存 Eclipse IDE の拡張	23

第 5 章 Developer for System z のインストール 25

インストール作業の要約	25
概要: インストール・ディスクからの Developer for System z のインストール	25
概要: ワークステーション上の電子イメージからの Developer for System z のインストール	26
電子イメージからのインストール	26
概要: 共用ドライブ上の電子イメージからの Developer for System z のインストール	27
概要: HTTP Web サーバー上のリポジトリからの Developer for System z のインストール	28
概要: HTTP Web サーバーへの Developer for System z の配置	29
ランチパッド・プログラムの使用	29
Installation Manager の操作	31
サイレント・インストール	35
共用ドライブまたはサーバーへのインストール・イメージのコピー	36

第 6 章 ポストインストール作業 39

ヘルプ・コンテンツの構成	39
EXEC CICS、EXEC SQL、EXEC DLI の各ステートメントのコンテンツ・アシストを有効にする操作	39
Information Management Software for z/OS Solutions (IMS) インフォメーション・センターのインストールと初期化	40
CICS Transaction Server バージョン・インフォメーション・センターのインストールと初期化	41
管理、ライセンス	41
許可ユーザー・ライセンス	42
フローティング・ライセンス	42
トークン・ライセンス	43
ライセンスの使用可能化	43
アクティベーション・キット	43
フローティング・ライセンスの適用	44
インストール済みパッケージのライセンス情報の表示	44
製品アクティベーション・キットをインポートする	44
フローティング・ライセンスの使用可能化	45
ライセンスの購入	46
ライセンスのサイレント・インストールおよび設定	47
Linux コンピューター上でのファイル・ハンドルの増加	47
Linux オペレーティング・システムの追加構成要件	48

第 7 章 Developer for System z の開始	51
第 8 章 インストール済みパッケージの変更	53
第 9 章 インストール済みパッケージの更新	55
第 10 章 Developer for System z のアンインストール	57
第 11 章 マイグレーション	59
WebSphere Developer for zSeries または WebSphere Developer for System z ワークスペースのマイグレーション	59
付録 A. 追加ソフトウェアのインストール	61

必要な System z コンポーネントのインストール	61
IBM TXSeries for Multiplatforms のインストール	61
RSE Server for Multiplatform のインストール	61
Rational Team Concert Integration 拡張機能のインストール	62
付録 B. 既知の問題および制限事項	63
付録 C. IBM Packaging Utility	65
IBM Rational Developer for System z 資料に関する特記事項.	67
著作権使用許諾	69
商標	70
索引	71



表

- | | | |
|----|---|----|
| 1. | ディスクと電子イメージ・ディレクトリーの名
前の対応 | 3 |
| 2. | Developer for System z のフィーチャー | 13 |

本書について

このインストール・ガイドには、IBM® Rational® Developer for System z® バージョン 8.5 のインストールおよびアンインストールを行うための手順が記載されています。

本書では、以下のタスクに関する情報が示されています。

- インストールの準備
- IBM Rational Developer for System z のインストール
- 必要なワークステーション・ソフトウェアおよびオプションのワークステーション・ソフトウェアのインストール
- System z コンポーネントのインストール
- RSE Server for Multiplatform のインストール
- インストールにおける既知の問題および制限事項の理解

本書では、以下の名前が使用されます。

- *IBM Rational Developer for System z* は *Developer for System z* と呼ばれます
- *IBM Rational Developer for System z Common Access Repository Manager* は、*Common Access Repository Manager* と呼ばれ、*CARMA* と省略されます
- *IBM Rational Developer for zEnterprise™* は *Developer for zEnterprise* と呼ばれます

注: 本書に記載されている構成情報は、IBM Rational Developer for System z バージョン 8.5 のものです。

本書の情報は、すべての Rational Developer for System z バージョン 8.5 パッケージに適用されます。Developer for System z に関する記述は、特に注記のない限り、Developer for zEnterprise にも適用されます。

本書の対象読者

本書は、ワークステーションで Developer for System z 8.5 クライアントをインストールおよび構成するプログラマーを対象としています。本書を使用するには、Microsoft Windows オペレーティング・システム、Red Hat Linux オペレーティング・システム、または SUSE Linux オペレーティング・システムに精通している必要があります。

Developer for System z についての詳細情報の入手先

本書には、Developer for System z の使用についての情報は含まれていません。詳細については、オンライン・ヘルプを参照してください。

製品の問題および制限事項の詳細については、*IBM Rational Developer for System z* インストール・ディスク または *IBM Rational Developer for zEnterprise* インストー

ル・ディスク の Documents¥nl¥en¥readme ディレクトリーにある
rdz85_releasenotes.html ファイルを参照してください。

更新された資料およびトラブルシューティング情報については、Developer for
System z Web サイトの「Library」ページ ([http://www.ibm.com/software/
rational/products/developer/systemz/library/index.html](http://www.ibm.com/software/rational/products/developer/systemz/library/index.html)) を参照してくださ
い。

第 1 章 Developer for System z の概要

Developer for System z には、ホスト・コンポーネントとワークステーション・クライアント・コンポーネントがあります。ホスト・コンポーネントは一般にその設置場所のシステム・プログラマーによってインストールされ、アプリケーション・プログラマーに対して透過的です。本書ではこれ以降、ホスト・コンポーネントが特に呼び出されない限り、Developer for System z という用語は、ツールのワークステーション・コンポーネント (Eclipse プラットフォームで稼働するグラフィカル・ユーザー・インターフェース) のことを指します。

Developer for System z は、Eclipse プラットフォーム (www.eclipse.org) で作成されている一揃いの開発ツールです。Eclipse プラットフォームはフレームワークとお考えください。また、Developer for System z および他のバンドル・オファリングはツール・コントリビューターとお考えください。

プリインストール作業

このタスクについて

製品をインストールする前に、以下に示す手順を実行してください。

1. ご使用のシステムが 3 ページの『第 2 章 クライアント・インストール要件』で説明されている要件を満たしていることを確認します。
2. ユーザー ID が製品をインストールするために必要なアクセス権を満たしていることを確認します。9 ページの『ユーザー特権の要件』を参照してください。
3. 11 ページの『第 3 章 インストールの計画』を読みます。
4. Rational License Key Server をバージョン 8.1.2 にアップグレードします。

注: Rational Developer for System z でフローティング・ライセンス (トークン・ライセンスを含む) を使用する場合、製品をインストールする前にライセンス・キー・サーバーを Rational License Key Server バージョン 8.1.2 にアップグレードする必要があります。Rational License Key Server バージョン 8.1.2 は製品の以前のバージョンでも使用できます。Rational License Key Server の v7.1.x 以前を v8.1.2 にアップグレードする方法については、『Migrating to Rational Common Licensing』(http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/rational/v0r0m0/index.jsp?topic=/com.ibm.rational.license.doc/topics/r_migration.html) を参照してください。

5. インストールまたはアンインストールを実行する前に、アンチウイルス/マルウェア検出ソフトウェアを無効にします。

注: 一部のアンチウイルス/マルウェア検出ソフトウェアは、特定のファイル (特に .dll ファイル) をロックすることがあります。そうすると、インストールとアンインストールの操作に支障をきたします。これらのプログラムによって .dll ファイルや他のファイルがロックされると、ファイルを削除できないという趣旨のエラーが生成され、インストールとアンインストールが失敗します。

第 2 章 クライアント・インストール要件

このタスクについて

インストールの準備として、以下の要件を確認する必要があります。

- メディア要件
- ハードウェア要件およびソフトウェア要件

メディア要件

以降に記載されている物理ディスクの名前は、以下の表に示すように、対応する電子イメージ・ディレクトリーの名前で置き換えることができます。

表 1. ディスクと電子イメージ・ディレクトリーの名前の対応

ディスク名	電子イメージ・ディレクトリー名
<i>IBM Rational Developer for System z</i> インストール・ディスク	<ul style="list-style-type: none">• RDz85_Setup• RDz85\disk1• RDz85_RTCz\disk1• RTC301¥disk1• RTC40\disk1
<i>IBM Rational Developer for zEnterprise</i> インストール・ディスク	<ul style="list-style-type: none">• RDz85Ent_Setup• RDz85Ent\disk1• RDz85_RTCz\disk1• RTC301¥disk1• RTC40\disk1
<i>IBM Rational Developer for System z</i> z/OS [®] Server インストール・ディスク	<ul style="list-style-type: none">• RDz85_zOS_SMPE
<i>IBM Rational Developer for zEnterprise z/OS and Multiplatforms Server</i> インストール・ディスク	<ul style="list-style-type: none">• RDz85_zOS_SMPE• RDz85Ent_RSE
<i>IBM Rational Developer for System z</i> クイック・スタートおよびドキュメンテーション・ディスク	<ul style="list-style-type: none">• RDz85_QuickStart• RDz85_Documentation
<i>IBM Rational Developer for zEnterprise</i> クイック・スタートおよびドキュメンテーション・ディスク	<ul style="list-style-type: none">• RDz85Ent_Documentation• RDz85Ent_QuickStart

ワークステーションへ *Developer for System z* をインストールするには、以下のいずれかのメディアにアクセスできる必要があります。

- *Developer for System z* インストール・ディスク:
 - *IBM Rational Developer for System z* インストール・ディスク または *IBM Rational Developer for zEnterprise* インストール・ディスク

- Developer for System z 電子イメージ

Developer for System z イメージを Passport Advantage® からダウンロードして展開すると、以下の Developer for System z インストール用ディレクトリーがワークステーションに作成されます。

- RDz85_Setup
- RDz85\disk1

または

- RDz85Ent_Setup
- RDz85Ent\disk1

必要な System z コンポーネントを System z ホストへインストールするには、以下のいずれかのメディアにアクセスする必要があります。

- Developer for System z インストール・ディスク:
 - *IBM Rational Developer for System z Server for z/OS Server* インストール・ディスク または *IBM Rational Developer for zEnterprise Server for z/OS and Multiplatforms Server* インストール・ディスク
- IBM Rational Developer for System z 電子イメージ

Developer for System z イメージを Passport Advantage からダウンロードして展開すると、以下のディレクトリーが、必要なソフトウェアを System z ホストにインストールするために使用されます。

- RDz85_zOS_SMPE
- RDz85Ent_RSE

ホスト・コードのインストールの手順については、関連する製品のディレクトリーにある以下のインストール構成資料を参照してください。

- RDz85_zOS_SMPE (z/OS システム)
- RDz85Ent_RSE (Linux システム)

追加オフリングのメディア

Developer for System z のメディアに加えて、Developer for System z にバンドルされている他のオフリング用に追加のインストール・メディアがある場合があります。これには、IBM Rational Business Developer または IBM Rational Application Developer が含まれることがあります。ご使用できるバンドル・ソフトウェアは、どの版の Developer for System z を購入したかによって異なります。本書ではこれ以降、Developer for System z にバンドルされているこれらのオフリングは、バンドル・オフリングと呼ばれます。

Rational Team Concert™ Integration 拡張機能をインストールするには、以下のいずれかのメディアにアクセスする必要があります。

- IBM Rational Developer for System z インストール・ディスク
 - *Rational Developer for System z* インストール・ディスク または *Rational Developer for zEnterprise* インストール・ディスク
- IBM Rational Developer for System z 電子イメージ

Developer for System z 電子イメージをダウンロードすると、拡張機能のインストールに次のディレクトリーが適用されます。

– RDz85_RTCz\disk1

このソフトウェアのインストールについて詳しくは、62 ページの『Rational Team Concert Integration 拡張機能のインストール』を参照してください。

ハードウェア要件およびソフトウェア要件

Developer for System z に関するハードウェア要件とソフトウェア要件についての以下の情報は、「*IBM Rational Developer for System z 前提条件*」にも記載されています。この前提条件の資料には、ハードウェア要件とソフトウェア要件についての最新情報が記載されています。前提条件の資料へのリンクは、以下の Developer for System z Web サイトの「Library」ページにあります。

<http://www.ibm.com/software/rational/products/developer/systemz/library/index.html>

Developer for System z のクライアント前提条件

Developer for System z は、大規模ビジネス・アプリケーションを作成するユーザーをサポートするためのライセンス・プログラムです。

このソフトウェアを使用するには、前提条件と相互必要条件があります。

ハードウェア要件

製品をインストールするためのハード・ディスクの最小スペース所要量に対応していることを確認します。インストール・プロセスの段階ごとのスペース所要量を次の表に示します。

ハードウェア	要件
プロセッサー	1 GHz 以上 32 ビット (x86) または 64 ビット (x64) プロセッサー デュアル・コアまたはクワッド・コアを推奨します。
メモリー	最小 2 GB RAM 推奨: 3 GB RAM 以上

ハードウェア	要件
ディスク・スペース	<p>IBM Rational Developer for System z のフィーチャーの最小セットをインストールするには、1 GB のディスク・スペースと 200 MB の一時スペースが必要です。</p> <p>IBM Rational Developer for zEnterprise のフルインストールには、1.8 GB のディスク・スペースと 200 MB の一時スペースが必要です。</p> <p>IBM Installation Manager がシステムにまだインストールされていない場合は、そのインストールのために追加で 210 MB のディスク・スペースが必要になります。</p> <p>その他のバンドルのソフトウェア・オファリングをインストールする場合は、必要なディスク・スペースの量が大きく変動する可能性があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ディスク・スペース所要量は、インストールするフィーチャーに応じて削減することができます。 開発するリソース用に、追加のディスク・スペースが必要になります。 Developer for System z や他のバンドル・オファリングをインストールするために電子イメージをダウンロードする場合は、インストール・メディアを格納するためディスク・スペースが追加で必要になります。 Windows で NTFS ファイル・システムの代わりに FAT32 ファイル・システムを使用する場合は、追加のディスク・スペースが必要になります。
ディスプレイ	<p>1024 x 768 の解像度で、256 色</p> <p>これより高い解像度および色数の多いカラー・パレットを推奨します。</p>
その他のハードウェア	Microsoft マウスまたはその互換ポインティング・デバイス

ワークステーションの前提条件

製品をインストールする前に、システムがソフトウェア要件を満たしているかを確認してください。

オペレーティング・システム: 以下のオペレーティング・システムがこの製品でサポートされています。

製品名	必要な PTF またはサービス・レベル
Microsoft Windows XP Professional	Service Pack 3 以降
Microsoft Windows Server 2008 Enterprise Edition	Service Pack 2 以降
Microsoft Windows Server 2008 Standard Edition	Service Pack 2 以降
Microsoft Windows Server 2008 R2 Enterprise Edition	Service Pack 1 以降

製品名	必要な PTF またはサービス・レベル
Microsoft Windows Server 2008 R2 Standard Edition	Service Pack 1 以降
Microsoft Windows Vista Business	Service Pack 2 以降
Microsoft Windows Vista Enterprise	Service Pack 2 以降
Microsoft Windows Vista Ultimate	Service Pack 2 以降
Microsoft Windows 7 Professional Edition	Service Pack 1 以降
Microsoft Windows 7 Enterprise Edition	Service Pack 1 以降
Microsoft Windows 7 Ultimate Edition	Service Pack 1 以降
Red Hat Linux Desktop v 5.0	有効なすべてのサービスを推奨
Red Hat Linux Desktop v 6.0	有効なすべてのサービスを推奨
Red Hat Linux Desktop v 6.0 64 ビット	必要なサービス・レベルなし
Red Hat Linux Enterprise Server v 5.0	有効なすべてのサービスを推奨
Red Hat Linux Enterprise Server v 6.0	有効なすべてのサービスを推奨
Red Hat Linux Enterprise Server v 6.0 64 ビット	必要なサービス・レベルなし
SUSE Linux Enterprise Server v 10.0	有効なすべてのサービスを推奨
SUSE Linux Enterprise Server v 11.0	有効なすべてのサービスを推奨
SUSE Linux Enterprise Desktop v 10.0	有効なすべてのサービスを推奨
SUSE Linux Enterprise Desktop v 11.0	有効なすべてのサービスを推奨

注:

1. Windows 7、Windows Server 2008 R2、Linux では、Developer for zEnterprise コンパイラーを使用して Windows COBOL や PL/I のバイナリーを作成することはできません。この機能を利用するためには、他のサポートされているオペレーティング・システムを使用してください。この機能は、Developer for zEnterprise でのみ使用可能です。
2. Developer for System z 言語サポートは、上記のオペレーティング・システムが基本的な言語をサポートしていることに依存します。
3. Developer for System z は、最低でも IBM Java Development Kit (JDK) のバージョン 1.6 を使用する Eclipse IDE バージョン 3.6.2 に対応するように開発されています。この要件を満たす既存の Eclipse IDE のみが拡張可能です。

開発用ホスト環境/仮想化サポート:

製品名	バージョン	必要な PTF またはサービス・レベル
Citrix® (32 ビットおよび 64 ビット)	Presentation Server 4.X	使用可能なすべてのメンテナンス
VMware®	Server バージョン 2.0、Workstation	使用可能なすべてのメンテナンス
VMware®	vSphere 4.0 ESXi	使用可能なすべてのメンテナンス

注: Developer for System z は、64 ビット Windows を 32 ビット互換モードで使用した Citrix 仮想環境下での実行をサポートします。

仮想化環境で使用する IBM SWG 製品のソフトウェア・サポート・サービスの詳細については、「VMware 環境における IBM SWG 製品に対するソフトウェア・サポート (Software support for IBM SWG products in a VMware environment)」を参照してください。

ワークステーションの相互必要条件

Developer for System z では、インストールする Developer for System z 機能により、インストールの相互必要条件としてこのセクションにリストされたソフトウェアのインストールが必要となります。

注: サポートされるデータベース・サーバー、Web アプリケーション・サーバー、およびその他のソフトウェア製品については、オンライン・ヘルプを参照してください。

TXSeries for Multiplatforms:

注: Developer for System z Linux クライアントでは、TXSeries はサポートされません。

組み込み CICS® ステートメントを使用するアプリケーションをサポートするには、以下のいずれか 1 つのレベルがインストールされている必要があります。

プログラム番号	製品名	必要な PTF またはサービス・レベル
5724-B44	TXSeries for Multiplatforms v 7.1	使用可能なすべてのメンテナンス
5655-M15	TXSeries for Multiplatforms v 6.2	使用可能なすべてのメンテナンス
5655-M15	TXSeries for Multiplatforms v 6.1	IZ00893

関連製品の Web サイトは次のとおりです。

<http://www.ibm.com/software/http/cics/txseries/>

DB2 for Windows:

組み込み SQL ステートメントを使用するアプリケーションをサポートするには、以下のいずれか 1 つのレベルがインストールされている必要があります。

プログラム番号	製品名	必要な PTF またはサービス・レベル
5765-F35	DB2® Workgroup Server Edition v 9.7	
5724-B55	DB2 Connect Personal Edition v 9.7	
5765-F41	DB2 Enterprise Server Edition v 9.7 for Windows	

関連製品の Web サイトは次のとおりです。

<http://www.ibm.com/software/data/db2/9/>

注: プリコンパイルには DB2 Workgroup Server Edition v9.7 が、またホスト・データベースへのアクセスには DB2 Connect™ Personal Edition v9.7 が必要です。

Web ブラウザー:

README ファイルとインストール・ガイドを表示するには、以下の Web ブラウザーのいずれかがインストールされている必要があります。

製品名	必要な PTF またはサービス・レベル
Microsoft Internet Explorer 7.0 以降	使用可能なすべてのメンテナンス
Firefox 1.5.x 以降	使用可能なすべてのメンテナンス

Adobe Acrobat Reader:

製品資料 PDF を正しく表示するには、以下のソフトウェアがインストールされている必要があります。

製品名	必要な PTF またはサービス・レベル
Adobe Acrobat Reader Version 7.0 以降	使用可能なすべてのメンテナンス

ユーザー特権の要件

IBM Rational Developer for System z をインストールするには、以下の要件を満たすユーザー ID が必要です。

- ユーザー ID に 2 バイト文字が含まれていない。
- システムのすべてのユーザーに対しインストールする場合は、管理者グループに属する ID が必要です。管理者特権がない場合、現行ユーザーに対してしかインストールできません。

第 3 章 インストールの計画

製品フィーチャーをインストールする前に、ここに記載されたすべてのトピックをお読みください。インストールを実際に開始する前にインストール・プロセスの主な段階を適切に計画および理解することによって、多くの問題を回避することができます。

インストール方式

Developer for System z のインストール時に使用できる方式は数多くあります。

使用するインストール方式を決定する要因のいくつかは以下のとおりです。

- インストール・ファイルにアクセスするために使用するフォーマットと方法 (例えば、インストール・ディスクまたは IBM Passport Advantage からダウンロードされたファイル)。
- ご使用のワークステーションにインストールするか、またはインストール・ファイルを企業内で使用可能にするか。
- Installation Manager の GUI を使用してインストールするか、またはサイレント・インストールを実行するか。

使用する一般的なインストール方式は以下のとおりです。

- インストール・ディスクからのインストール
- ワークステーションにダウンロードされた電子イメージからのインストール
- 共用ドライブ上の電子イメージからのインストール
- HTTP サーバー上のリポジトリからのインストール

注: 後者の 3 つの方式では、Developer for System z をインストールするために、サイレント・モードで Installation Manager プログラムを実行することを選択できます。サイレント・モードでの Installation Manager の実行について詳しくは、35 ページの『サイレント・インストール』を参照してください。

インストール・ディスクからのインストール

この方式では、インストール・ファイルが含まれているインストール・ディスクを使用して、一般に、各自のワークステーションに Developer for System z をインストールします。手順の概要については、25 ページの『概要: インストール・ディスクからの Developer for System z のインストール』を参照してください。

電子イメージの使用

電子イメージの解凍

IBM Passport Advantage からインストール・ファイルをダウンロードした場合は、インストールを開始する前に、Developer for System z およびインストールを希望す

るバンドル・オフリングの圧縮ファイルから電子イメージを解凍する必要があります。Developer for System z 電子イメージは、zip ファイルとして圧縮されています。

ワークステーションにダウンロードされた電子イメージからのインストール

この方式では、IBM Passport Advantage からダウンロードしたインストール・ファイルを使用して、ワークステーションに Developer for System z をインストールします。手順の概要については、26 ページの『概要: ワークステーション上の電子イメージからの Developer for System z のインストール』を参照してください。

共用ドライブ上の電子イメージからのインストール

この方式では、企業内のユーザーが単一ロケーションから Developer for System z のインストール・ファイルにアクセスできるように、共用ドライブに電子イメージを置きます。手順の概要については、27 ページの『概要: 共用ドライブ上の電子イメージからの Developer for System z のインストール』を参照してください。

HTTP サーバー上のリポジトリからのインストール

この方式は、ネットワーク全体にインストールするための代替方法です。この方式は前の方式とは異なります。異なるのは、Developer for System z のインストール・ファイルを HTTP Web サーバーに配置するために、Developer for System z インストール・メディアの Rational Enterprise Deployment ディスクに用意されている IBM Packaging Utility というユーティリティ・アプリケーションを使用しなければならない点です。IBM Packaging Utility は、HTTP Web サーバーから直接 Developer for System z をインストールできるように、そのインストール・ファイルをパッケージ・フォーマットでコピーするために使用します。このパッケージが入った HTTP Web サーバー上のディレクトリーは、リポジトリと呼ばれます。同じリポジトリをその他のオフリングおよび将来のサービス更新に使用することができます。手順の概要については、28 ページの『概要: HTTP Web サーバー上のリポジトリからの Developer for System z のインストール』および 29 ページの『概要: HTTP Web サーバーへの Developer for System z の配置』を参照してください。

フィーチャーのインストール

インストールするフィーチャーおよびバンドル・オフリングを選択して、Developer for System z のインストールをカスタマイズすることができます。Developer for System z ランチパッドでは、ガイド付きインストールまたはエキスパート・インストールを選択することができます。

Developer for System z ランチパッド・プログラムについて詳しくは、29 ページの『ランチパッド・プログラムの使用』を参照してください。

Installation Manager は、フィーチャー間の依存関係を自動的に強制し、必要なフィーチャーが選択解除されないようにします。

注: パッケージのインストールが終了した後でも、Installation Manager で「パッケージの変更」ウィザードを実行することにより、インストール済み環境にフィーチ

ャーの追加や除去ができます。詳しくは、53 ページの『第 8 章 インストール済みパッケージの変更』を参照してください。

Developer for System z のフィーチャー

次の表は、インストール可能な Developer for System z のフィーチャーを示しています。Developer for System z にバンドルされている他のオフアリングの使用可能なフィーチャーについては、それらのオフアリングの資料を参照してください。

表 2. Developer for System z のフィーチャー

フィーチャー	説明
AIX® 用 C および C++ 開発ツール 注: このフィーチャーは、Developer for zEnterprise でのみ使用可能です。	AIX 用の C/C++ プログラムを編集、コンパイル、およびデバッグするためのツールを提供します。
Linux 用 C および C++ 開発ツール 注: このフィーチャーは、Developer for zEnterprise でのみ使用可能です。	Linux 用の C/C++ プログラムを編集、コンパイル、およびデバッグするためのツールを提供します。
AIX 用 COBOL 開発ツール 注: このフィーチャーは、Developer for zEnterprise でのみ使用可能です。	AIX 用の COBOL プログラムを編集、コンパイル、およびデバッグするためのツールを提供します。
System z 統合開発環境 (必須)	対話式のワークステーション・ベース環境を提供します。この環境では、メインフレームに接続でき、COBOL、PL/I、アセンブラー、C/C++、および Java で記述されたメインフレーム・ベースのアプリケーションを開発できます。 Developer for zEnterprise では、このフィーチャーは COBOL、PL/I、および Java で記述されたワークステーション・ベースのアプリケーションの開発もサポートし、他の環境 (System z 上の AIX® および Linux など) への接続も組み込まれています。
COBOL for Windows と PL/I for Windows [非推奨]** ** この表の下注を参照してください。 注: このフィーチャーは、現在は Developer for zEnterprise オフアリングでのみ使用できます。	COBOL プログラムおよび PL/I プログラムによる Windows バイナリーの作成を可能にします。これは、Windows シェル・スクリプトまたは CICS TXSeries ランタイムでアプリケーションをローカルに単体テストするときに使用します。このフィーチャーは、ローカル構文チェックには必要ありません。ローカル構文チェック機能は System z 統合開発環境フィーチャーを選択すると使用可能になります。 このフィーチャーは、これ以上拡張されません。Rational Developer for zEnterprise の将来のバージョンでは削除されます。詳細については、IBM Rational Developer for System z サポートの Web サイト (http://www.ibm.com/software/awdtools/rdz/support) を参照してください。
コード分析	コードが規則やベスト・プラクティスに準拠しているかを検査します。問題の起こりそうな箇所を強調表示し、品質向上のためのコード変更を推奨します。

表 2. Developer for System z のフィーチャー (続き)

フィーチャー	説明
行レベル・コード・カバレッジ	アプリケーションのテスト範囲を測定し、そのレポートを作成するためのツールを提供します。レポートは、テスト済みのソース・コード行と、テストが必要なソース・コード行を示します。
IBM z/OS Automated Unit Testing Framework (zUnit)	Enterprise COBOL および PL/I の、コード主導型の単体テスト・フレームワークを提供します。IBM z/OS Automated Unit Testing Framework (zUnit) は、zUnit フレームワークを使用して作成された Enterprise COBOL および PL/I 単体テスト・ケースの実行および検証を行う、自動化ソリューションを提供します。
System z コード生成プログラム	UML モデルまたはユーザー提供の入力から、System z のアプリケーション・コード・スケルトンおよびロジックを迅速に作成できる設計ツールおよびウィザードを提供します。
SCLM Developer Toolkit	Software Configuration and Library Manager (SCLM) が管理するソース・コードにアクセスして操作するためのツールを提供します。
Rational ClearCase® SCM Adapter	IBM Rational ClearCase SCM プラグインおよび ClearCase MVFS プラグインを提供します。これらのプラグインにより、ClearCase VOB およびビュー・サーバーもインストールされている場合に、スナップショット・ビューおよび動的ビューを使用して、ClearCase のバージョン付きオブジェクト・ベース (VOB) 中のソフトウェア成果物のバージョン管理を行うことが可能になります。
CA Endevor Software Change Manager	CA Endevor Software Change Manager が管理するソース・コードにアクセスして操作するためのツールを提供します。
Enterprise Service Tools for CICS (サービス・コンポーネント・アーキテクチャーを含む)	Enterprise Service Tools for CICS は、最新のアプリケーション・アーキテクチャーならびに既存の CICS アプリケーション・プロセスの変換および再利用をサポートする、統合されたツール・セットを提供します。これらのツールは、Web サービス記述の生成、および CICS TS や CICS Service Flow Runtime を含み、直接 z/OS システムに対して成果物を処理するサービス・フローをサポートします。Enterprise Service Tools により、サービス指向アーキテクチャー (SOA) への移動が可能になります。
BMS Screen Designer	基本マッピング・サポート (BMS) マップ・セットを視覚的に作成および変更することができます。CICS 開発者で、端末ベースのツール (例えば SDF II) に習熟した開発者や、GUI ベースのツール (VA COBOL に組み込まれた BMS エディターなど) に習熟した開発者が使用できるようにデザインされています。

表 2. Developer for System z のフィーチャー (続き)

フィーチャー	説明
CICS コード生成プログラム	UML モデルまたはユーザー提供の入力から、CICS Transaction Server のアプリケーション・コード・スケルトンおよびロジックを迅速に作成できる設計ツールおよびウィザードを提供します。例えば、UML モデルまたはデータベース・スキーマ定義を使用して、DB2 テーブルに作成、読み取り、更新、および削除のインターフェースを提供する CICS トランザクションを生成します。
Enterprise Service Tools for IMS™	Enterprise Service Tools for IMS は、最新のアプリケーション・アーキテクチャーならびに既存の IMS アプリケーション・プロセスの変換および再利用をサポートする、統合されたツール・セットを提供します。これらのツールは、Web サービス記述の生成、および IMS SOAP ゲートウェイや IMS info 2.0 アプリケーションを含み、直接 z/OS システムに対して成果物を処理することをサポートします。Enterprise Service Tools により、サービス指向アーキテクチャー (SOA) への移動が可能になります。
MFS Screen Designer	メッセージ形式サービス (MFS) メッセージの作成および変更と、ファイルのフォーマット設定を行うことができます。多くの情報管理システム (IMS) プログラムは、端末装置との間で送受信するメッセージをフォーマット設定する IMS Transaction Manager 環境機能の 1 つである、MFS に基づいています。
IMS コード生成プログラム	共通のプログラミング・オブジェクトを IMS アプリケーション・コードに迅速に追加できるコード・スニペットを提供します。
データ・ツール	テーブル、テーブル・ビュー、およびフィルターを操作するためのリレーショナル・データベース・ツールを提供します。これらのツールでは、データベース・テーブルのリバース・エンジニアリングによって、または DDL スクリプトを使用することによって、物理データベース・モデルを作成できます。このツールを使用して、SQL ステートメント、DB2 ルーチン (ストアド・プロシージャおよびユーザー定義関数など)、および SQLJ、SQL DDL、XML ファイルといった何種類ものファイル・タイプを作成することもできます。
System z Stored Procedures	COBOL、PL/I、Java、または SQL で書かれた DB2 ストアド・プロシージャを作成してテストし、それらを z/OS システムに直接デプロイすることができます。

表 2. Developer for System z のフィーチャー (続き)

フィーチャー	説明
Fault Analyzer (Windows でのみ使用可能)	異常終了する問題のリアルタイム分析時に IBM Fault Analyzer for z/OS によって作成される障害エントリーを処理できるようにします。 注: このフィーチャーには、IBM Fault Analyzer for z/OS のライセンスが必要です。
Common Access Repository Manager (CARMA)	System z ベースのソース制御管理ツールにアクセスするための、統一されたインターフェースおよび一連のサービスを提供します。CARMA はまた、カスタム・ソース制御管理システムにアクセスおよび結合するためのフレームワークとして使用できる汎用グラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) クライアントを提供します。
プラグイン開発環境 (PDE)	IBM Software Delivery Platform Eclipse 環境を拡張するために使用できる Eclipse プラグインを作成、開発、テスト、デバッグ、およびデプロイするためのツールを提供します

注: ** COBOL および PL/I for Windows は、Windows 7、Windows 2008 R2、または Linux の各プラットフォームでは使用できません。

第 4 章 IBM Installation Manager

IBM Installation Manager は、Developer for System z および他のパッケージをワークステーションにインストールするプログラムです。また、インストールしたこれらのパッケージや他のパッケージを更新、変更、およびアンインストールします。パッケージとは、Installation Manager を使用してインストールするように設計されている製品、コンポーネント・グループ、または単一のコンポーネントです。

IBM Installation Manager の最新情報については、下記アドレスの Installation Manager インフォメーション・センターを参照してください。

<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1r5/index.jsp>

Installation Manager は、時間を節約するための数多くのフィーチャーを提供するインストール管理ツールです。コンピューターで製品パッケージのインストール、更新、変更、およびアンインストールを行うのに役立ちます。インストールしようとしているパッケージ、さらにすでにインストールされているパッケージ、およびインストール可能なパッケージを追跡します。最新バージョンのパッケージをインストールしようとしていることがわかるように、更新を検索します。また、インストールするパッケージのライセンス管理や、パッケージの更新および変更を行うためのツールも備えています。

Developer for System z を多数のユーザーに対してデプロイする方法については、Installation Manager インフォメーション・センターの『Enterprise installation articles』セクションにある情報を参照してください。以下のサイトです。

<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1r5/topic/com.ibm.im.articles.doc/topics/articles.html>

さらに、developerWorks® の Rational Installation Wiki にある情報も参照してください。以下のサイトです。

<https://www.ibm.com/developerworks/wikis/display/rationalinstall/Home>

Installation Manager には、パッケージの保守を、そのライフ・サイクルを通じて容易にするための以下の 6 つのウィザードがあります。

- 「インストール」ウィザードは、インストール・プロセスを支援します。デフォルトを受け入れてパッケージをインストールすることも、デフォルト設定を変更してインストールをカスタマイズすることもできます。パッケージをインストールする前に、ウィザードで選択したすべての項目の要約が表示されます。ウィザードを使用すると、1 つ以上のパッケージを一度にインストールすることができます。
- 「更新」ウィザードは、インストール済みパッケージに適用可能な更新を検索します。更新は、リリース済みのフィックス、新規フィーチャー、または製品の新規バージョンである可能性があります。ウィザードには更新内容の詳細が表示されます。更新を適用するかどうかを指定できます。

- 「変更」ウィザードでは、インストール済みのパッケージの特定の要素を変更できます。パッケージを初めてインストールするときに、インストールするフィーチャーを選択します。後で他のフィーチャーが必要になった場合は、「変更」ウィザードを使用してそれらのフィーチャーを追加できます。フィーチャーを削除することも可能です。
- 「ライセンスの管理」ウィザードでは、パッケージのライセンスをセットアップできます。試用版ライセンスをフル・ライセンスに変更したり、フローティング・ライセンス用にサーバーをセットアップしたり、パッケージごとに使用するライセンスのタイプを選択したりするには、このウィザードを使用します。
- 「インポート」ウィザードは、Installation Manager 以外のインストール・ツールを使用してインストールしたパッケージを、インストール済みパッケージのリストに追加します。

Installation Manager は、インストールする製品（選択可能なフィーチャーや製品の保守更新を含む）を追跡管理します。Installation Manager でインストールできる一部の製品の旧バージョンが他のインストール・テクノロジーでインストールされている可能性もあります。Installation Manager は、これらの製品の変更や更新を実行する前に、これらの製品の既存のインストール環境に関する情報をインポートしなければなりません。

注: このウィザードは、Installation Manager が、このフィーチャーを必要とするパッケージをリポジトリ内で検出した後のみ使用できます。

- 「ロールバック」ウィザードでは、パッケージを前のバージョンに戻すことができます。
- 「アンインストール」ウィザードは、コンピューターからパッケージを削除します。複数のパッケージを一度にアンインストールすることができます。

Installation Manager のインストール

このタスクについて

IBM Installation Manager は通常、Developer for System z インストール・プロセスの一部として自動的にインストールされます。

Developer for System z をインストールせずに IBM Installation Manager 自体をインストールする必要がある場合、IBM Rational Developer for System z インストール・セットアップ・ディスクの `InstallerImage_platform` ディレクトリー、または電子イメージをダウンロードした場合は `RDz85_Setup` ディレクトリーに、Installation Manager があります (*platform* は、インストール先のプラットフォーム (*win32* や *linux* など) です)。Installation Manager をインストール・メディアから直接インストールすることも、他のユーザーがアクセスできる共有ロケーションに `InstallerImage_platform` ディレクトリーをコピーすることもできます。

1. *platform* ディレクトリーに移動します。
2. システムの全ユーザーのために管理者としてインストールする場合は、以下のコマンドを実行します。

Windows

install.exe

Linux

install

現行ユーザーだけのために非管理者としてインストールする場合は、以下のコマンドを実行します。

Windows

userinst.exe

Linux

userinst

3. 「パッケージのインストール」ウィザードの最初のページにある「**他のバージョンと拡張機能の確認**」をクリックして、入手可能な最新のバージョンをインストールします。より新しいバージョンが使用できる場合は、それが自動的にインストール対象として選択されます。「次へ」をクリックします。
4. 「ライセンス」ページで、IBM Installation Manager のご使用条件を読みます。ご使用条件のすべての条項に同意する場合は、「**使用条件の条項に同意します**」をクリックしてから、「次へ」をクリックします。
5. 「ロケーション」ページの「Installation Manager ディレクトリー」フィールドに、Installation Manager をインストールするディレクトリーのパスを入力するか、デフォルトのパスをそのまま受け入れます。次に、「次へ」をクリックします。
6. インストール・プロセスを開始する前に「要約」ページで選択内容を確認します。選択内容を変更する場合は、「戻る」をクリックして、前のページに戻ります。選択内容がそのままであれば、「インストール」をクリックします。

また、以下の手順で、Installation Manager のサイレント・インストールを実行することもできます。

1. コマンド・プロンプトまたは端末ウィンドウを開き、`InstallerImage_platform` ディレクトリーに移動します (*platform* は、インストール先のプラットフォームです)。
2. システムの全ユーザーのために管理者としてサイレント・インストールを実行する場合は、以下のコマンドを実行します。

Windows

installc.exe -acceptLicense

Linux

```
install -acceptLicense
```

現行ユーザーだけのために非管理者としてインストールする場合は、以下のコマンドを実行します。

Windows

```
userinstc.exe -acceptLicense
```

Linux

```
userinst -acceptLicense
```

注: -acceptLicense コマンド・ライン・オプションを指定することで、IBM Installation Manager のご使用条件を受け入れていることを示します。

Installation Manager の開始

このタスクについて

IBM Installation Manager は、Developer for System z のインストールを実行すると、自動的にインストールされ、開始します。

Installation Manager を手動で開始して、更新、変更、ロールバック、またはアンインストールをインストール後のパッケージに対して行う必要がある場合は、以下を行います。

Windows

1. タスクバーから「スタート」メニューを開きます。
2.
 - 管理者によるインストールの場合、「すべてのプログラム」 -> 「IBM Installation Manager」 -> 「IBM Installation Manager」を選択します。
 - 非管理者によるインストールの場合、「すべてのプログラム」 -> 「My IBM Installation Manager」 -> 「IBM Installation Manager」を選択します。

Linux

1. 端末ウィンドウを開きます。
2. <Installation Manager install directory>/eclipse に変更します。
3. Run ./IBMIM

アンインストールと Installation Manager

このタスクについて

注: すべてのパッケージがアンインストールされるまで IBM Installation Manager をアンインストールすることはできません。

Windows

「プログラムの追加と削除」パネルを使用して、IBM Installation Manager をアンインストールする必要があります。

1. タスクバーから「スタート」メニューを開きます。
2. 「コントロール パネル」 -> 「プログラムの追加と削除」 -> 「IBM Installation Manager」を選択します。
3. 「削除」ボタンをクリックして、オペレーティング・システムから出される指示に従います。

Linux

Installation Manager をアンインストールするには次の手順を実行します。

1. 端末ウィンドウを開きます。
2. `/var/ibm/InstallationManager/uninstall/uninstall` を実行します。

Installation Manager の使用

インストール・リポジトリ

インストール可能なオファリングまたはパッケージは、リポジトリと呼ばれるロケーションに保管されます。これは HTTP Web サーバー、共用ネットワーク・ドライブ、物理ディスク、ご使用のローカル・マシンの上のいずれかになります。Installation Manager は、これらのリポジトリからパッケージを取り出して、それをシステムにインストールします。

Developer for System z のインストールをランチパッド・プログラムから起動すると、必要なリポジトリ情報が Installation Manager へ自動的に渡されます。

Windows の「スタート」メニューから手動で Installation Manager を開始するときは必ず、Installation Manager のリポジトリ設定に、インストールするパッケージが入ったリポジトリを指定して、Installation Manager にその検索場所を知らせる必要があります。詳しくは、22 ページの『Installation Manager でのリポジトリ設定』を参照してください。

組織によっては、独自の製品パッケージをイントラネット内でバンドルおよびホストする場合があります。このタイプのビジネス・ケース・シナリオについては、12 ページの『HTTP サーバー上のリポジトリからのインストール』を参照してください。システム管理者から正しい URL を取得することが必要になります。

デフォルトでは、IBM Installation Manager は、インストールするそれぞれのパッケージに組み込まれた URL を使用して、インターネット経由でリポジトリ・サーバーに接続し、サービス更新や新規フィーチャーといったインストール可能なパッケージを検索します。

Installation Manager でのリポジトリ設定

このタスクについて

Developer for System z のインストールをランチパッド・プログラムから開始すると、必要なリポジトリ情報がその開始時に Installation Manager へ自動的に渡されます。ただし、例えば Web サーバーにあるリポジトリからパッケージをインストールするなどのために、Windows の「スタート」メニューから手動で Installation Manager を開始する場合は、パッケージをインストールする前に、Installation Manager の設定にリポジトリ・ロケーションを追加する必要があります。これは、Installation Manager の「設定」ウィンドウの「リポジトリ」パネルで行います。デフォルトでは、Installation Manager は、それぞれの Rational ソフトウェア開発製品に組み込まれた URL を使用して、インターネット経由でリポジトリ・サーバーに接続し、インストール可能なパッケージ、更新、および新規フィーチャーを検索します。お客様の組織で、イントラネット・サイトを使用するためにリポジトリをリダイレクトすることが必要になる場合があります。

注: インストール・プロセスを開始する前に、必ず管理者からインストール・パッケージのリポジトリ URL を取得してください。

Installation Manager でリポジトリ・ロケーションを追加、編集、または除去するには、以下の手順を行います。

1. Installation Manager を開始します。
2. Installation Manager の「開始」ページで、「ファイル」->「設定」をクリックしてから、「リポジトリ」をクリックします。「リポジトリ」ページが開きます。このページには、使用可能なリポジトリ、そのロケーション、およびアクセス可能かどうかが表示されます。
3. 「リポジトリ」ページで「リポジトリの追加」をクリックします。
4. 「リポジトリの追加」ウィンドウで、リポジトリ・ロケーションの URL を入力するか、URL を参照してファイル・パスを入力してから、「OK」をクリックします。新規または変更されたリポジトリ・ロケーションがリストされます。リポジトリがアクセス不能である場合は、「アクセス可能」列に赤い x が表示されます。
5. 「OK」をクリックして終了します。

パッケージ・グループと共用リソース・ディレクトリー

IBM Installation Manager を使用して Developer for System z をインストールするときは、パッケージ・グループおよび共用リソース・ディレクトリーを選択する必要があります。

パッケージ・グループ

インストール・プロセス中に、Developer for System z およびインストールする他のバンドル・オフリングのパッケージ・グループを指定する必要があります。パッケージ・グループは、パッケージが同じグループ内の他のパッケージとリソースを共用するディレクトリーを表します。これはシェル共用として知られています。

Installation Manager を使用して Developer for System z およびバンドル・オフリングをインストールする場合は、新しいパッケージ・グループを作成するか、パッケージを既存のパッケージ・グループにインストールするかを選択することができます。

ます。(パッケージによっては、パッケージ・グループを共用できないことがあります。このような場合は、既存のパッケージ・グループを使用するためのオプションは使用不可になります。)

注: ほとんどの環境では、複数のパッケージを同時にインストールすると、すべてのパッケージが同じパッケージ・グループにインストールされます。

パッケージ・グループには、自動的に名前が割り当てられます。ただし、パッケージ・グループのインストール・ディレクトリーはユーザーが選択します。

パッケージを正常にインストールして、パッケージ・グループを作成した後は、そのパッケージ・グループのインストール・ディレクトリーを変更できません。インストール・ディレクトリーには、そのパッケージ・グループにインストールしたパッケージに固有のファイルとリソースが入っています。他のパッケージ・グループが共用する可能性のあるパッケージ内の他のリソースは、共用リソース・ディレクトリーに入れられます。

共用リソース・ディレクトリー

共用リソース・ディレクトリーは、異なるパッケージ・グループに入っている可能性の高い、異なるパッケージによる共用が可能なリソースを保管しているディレクトリーです。これらのリソースに共通のロケーションを使用すると、**Installation Manager** は、複数のパッケージによって使用される同じリソースの個別コピーをインストールするのではなく、各リソースの 1 つのコピーのみをインストールしてディスク・スペースを節約できます。

重要: 共用リソース・ディレクトリーを指定できるのは、パッケージの初回インストール時の 1 回のみです。最適な結果が得られるように、最大のドライブを使用してください。すべてのパッケージをアンインストールしない限り、後でディレクトリー・ロケーションを変更することはできません。

既存 Eclipse IDE の拡張

Developer for System z パッケージには、Eclipse 統合開発環境 (IDE) のバージョンつまりワークベンチが含まれます。これは Developer for System z のインストール時にインストールされます。ただし、すでにインストールされている既存の Eclipse 統合 IDE がワークステーションにある場合は、既存の環境に Developer for System z 機能を追加することによって、その IDE を拡張できます。

Developer for System z のインストール中に、「パッケージのインストール」ウィザードの「ロケーション」ページで「**既存の Eclipse IDE の拡張 (Extend an existing Eclipse IDE)**」オプションを選択して、既存の Eclipse IDE を拡張します。既存の Eclipse IDE と、使用する Java 仮想マシン (JVM) のロケーションが求められます。

例えば、Developer for System z パッケージで提供される機能を取得したいが、Developer for System z の機能を操作する際には現行 IDE の設定を使用したい場合などに、既存の Eclipse IDE を拡張することができます。また、すでにインストール済みのプラグインを操作して、Eclipse IDE を拡張することもできます。

既存の Eclipse IDE はバージョン 3.6.2 でなければなりません。また、拡張する IBM Java Development Kit (JDK) は少なくともバージョン 1.6 を使用する必要があ

ります。Installation Manager は、指定された Eclipse 環境がインストール・パッケージの要件を満たすかどうかを検査します。要件を満たしていない場合には、その Eclipse IDE を拡張できません。

第 5 章 Developer for System z のインストール

インストール作業の要約

ここでは、Developer for System z のインストール時に使用する各種のインストール方式の概要を示します。

IBM Rational Developer for System z インストール・ディスクに関するすべての記載は、特に注記のない限り、IBM Rational Developer for zEnterprise インストール・ディスクにも適用されます。RDz85_Setup ディレクトリーに対するすべての記載は、特に注記のない限り RDz85Ent_Setup セットアップにも適用されます。

概要: インストール・ディスクからの Developer for System z のインストール

このタスクについて

このインストール・シナリオでは、インストール・ファイルが含まれている物理ディスクを使用して、一般に、各自のワークステーションに Developer for System z をインストールします。

インストール・ディスクからインストールする場合の一般的な手順は、以下のとおりです。

1. 1 ページの『プリインストール作業』にリストされているプリインストール手順を完了します。
2. *IBM Rational Developer for System z* インストール・ディスク を、ご使用の DVD ドライブに挿入します。
3. システムで自動実行が有効になっている場合は、Developer for System z のランチパッド・プログラムが自動的にオープンします。自動実行が有効になっていない場合は、ディスクのルートから次のコマンドを実行することによってランチパッド・プログラムを開始します。

Windows

```
1 launchpad.exe
```

Linux

```
1 launchpad.sh
```

詳しくは、29 ページの『ランチパッド・プログラムの使用』を参照してください。

4. 「**Rational Developer for System z のインストール**」を選択します。

5. Developer for System z のエキスパート・インストールかガイド付きインストールのどちらを実行するか決定します。ガイド付きインストールでは、インストールするフィーチャーの決定に役立てるため、インストール・ウィザードを使用します。エキスパート・インストールは、最も一般的なフィーチャーが選択された状態で開始します。ここで、独自にインストールするフィーチャーを決定することができます。詳しくは、29 ページの『ランチパッド・プログラムの使用』を参照してください。
6. IBM Installation Manager の「パッケージのインストール」ウィザードの画面上の指示に従って、Developer for System z およびバンドル・オファリングをインストールします。詳しくは、31 ページの『Installation Manager の操作』を参照してください。
7. 必要に応じて、インストール済みの Developer for System z およびバンドル・オファリングのライセンスを構成します。試用版ライセンスを持っている状態で期限付きライセンスまたは永続ライセンスを構成する必要がある場合や、フローティング・ライセンスを構成することを望んでいる場合は、ここでその作業を行います。詳しくは、41 ページの『管理、ライセンス』を参照してください。
8. Developer for System z と一緒に組み込まれた追加ソフトウェアをインストールします。詳しくは、61 ページの『付録 A. 追加ソフトウェアのインストール』を参照してください。

概要: ワークステーション上の電子イメージからの Developer for System z のインストール

このタスクについて

電子インストール・イメージからインストールする場合の一般的な手順は、以下のとおりです。

1. IBM Passport Advantage からダウンロードする必要があるファイルと、解凍したインストール・イメージの両方、さらにはインストールを計画しているオファリングを格納するための十分なスペースがワークステーションにあることを確認します。5 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。
2. インストールする Developer for System z およびバンドル・オファリングの必要なパーツをすべて IBM Passport Advantage から一時ディレクトリーにダウンロードします。
3. ダウンロードした圧縮ファイルからインストール・イメージを解凍して、インストール・イメージが完全であることを検証します。詳しくは、11 ページの『電子イメージの解凍』を参照してください。
4. 下の『電子イメージからのインストール』の手順に進みます。

電子イメージからのインストール

このタスクについて

以下の手順を行います。

1. 1 ページの『プリインストール作業』にリストされているプリインストール手順を完了します。

2. RDz85_Setup ディレクトリーのルートから次のコマンドを実行することによってランチパッド・プログラムを開始します。

Windows

```
launchpad.exe
```

Linux

```
launchpad.sh
```

詳しくは、25 ページの『第 5 章 Developer for System z のインストール』を参照してください。

3. 「**Rational Developer for System z のインストール**」を選択します。
4. Developer for System z のエキスパート・インストールかガイド付きインストールのどちらを実行するか決定します。ガイド付きインストールでは、インストールするフィーチャーの決定に役立てるため、インストール・ウィザードを使用します。エキスパート・インストールは、最も一般的なフィーチャーが選択された状態で開始します。ここで、独自にインストールするフィーチャーを決定することができます。詳しくは、25 ページの『第 5 章 Developer for System z のインストール』を参照してください。
5. IBM Installation Manager の「パッケージのインストール」ウィザードの画面上の指示に従って、Developer for System z およびバンドル・オフアリングをインストールします。詳しくは、31 ページの『Installation Manager の操作』を参照してください。
6. 必要に応じて、インストール済みの Developer for System z およびバンドル・オフアリングのライセンスを構成します。試用版ライセンスを持っている状態で期限付きライセンスまたは永続ライセンスを構成する必要がある場合や、フローティング・ライセンスを構成することを望んでいる場合は、ここでその作業を行います。詳しくは、41 ページの『管理、ライセンス』を参照してください。
7. Developer for System z と一緒に組み込まれた追加ソフトウェアをインストールします。詳しくは、61 ページの『付録 A. 追加ソフトウェアのインストール』を参照してください。

概要: 共用ドライブ上の電子イメージからの Developer for System z のインストール

このタスクについて

このシナリオでは、企業内のユーザーが単一ロケーションから Developer for System z およびバンドル・オフアリングのインストール・ファイルにアクセスできるように、共用ドライブに電子イメージを置きます。これは、数多くのユーザー・システムでサイレント・インストールを実行する必要がある場合にも役立ちます。以下の手順は、共用ドライブにインストール・イメージを置く人が行う手順です。

1. IBM Passport Advantage からダウンロードする必要があるファイルと、解凍したインストール・イメージの両方を保管するために十分なディスク・スペースが共用ドライブにあることを確認します。詳しくは、5 ページの『ハードウェア要件』を参照してください。

2. Developer for System z およびバンドル・オファリングの必要なパーツをすべて IBM Passport Advantage から共用ドライブ上の一時ディレクトリーにダウンロードします。

注: また、パーツをワークステーションにダウンロードして、解凍したインストール・イメージのみを共用ドライブにコピーすることもできます。

3. ダウンロードしたファイルからインストール・イメージを共用ドライブ上のアクセス可能なディレクトリーに解凍して、インストール・イメージが完全であることを検証します。詳しくは、11 ページの『電子イメージの解凍』を参照してください。

共用ドライブ上のインストール・ファイルから Developer for System z を対話式にインストールするには、以下の手順を行います。

1. インストール・イメージのある共用ドライブ上の RDz85_Setup ディレクトリーに移動します。
2. 26 ページの『電子イメージからのインストール』の手順に従って、Developer for System z およびバンドル・オファリングをインストールします。

共用電子イメージを使用したサイレント・インストールの実行については、35 ページの『サイレント・インストール』を参照してください。

概要: HTTP Web サーバー上のリポジトリーからの Developer for System z のインストール

このタスクについて

このシナリオでは、IBM Installation Manager が HTTP Web サーバーから製品パッケージを取得します。

以下の手順では、Developer for System z およびバンドル・オファリングのパッケージが入ったリポジトリーを HTTP Web サーバー上に作成したものと想定します。HTTP Web サーバーへのインストール・パッケージのコピーについて詳しくは、29 ページの『概要: HTTP Web サーバーへの Developer for System z の配置』を参照してください。

HTTP サーバー上のリポジトリーから Developer for System z パッケージをインストールするには、以下の手順を行います。

1. 1 ページの『プリインストール作業』にリストされているプリインストール手順を完了します。
2. IBM Installation Manager をインストールします。18 ページの『Installation Manager のインストール』を参照してください。
3. Installation Manager を開始します。詳しくは、20 ページの『Installation Manager の開始』を参照してください。
4. Installation Manager で、Developer for System z パッケージが入ったリポジトリーの URL をリポジトリー設定に追加します。22 ページの『Installation Manager でのリポジトリー設定』を参照してください。

5. 「インストール」をクリックして Installation Manager で「パッケージのインストール」ウィザードを開始し、画面上の指示に従って、インストールを完了します。
6. 必要に応じて、インストール済みの Developer for System z およびバンドル・オフリングのライセンスを構成します。試用版ライセンスを持っている状態で期限付きライセンスまたは永続ライセンスを構成する必要がある場合や、フローティング・ライセンスを構成することを望んでいる場合は、ここでその作業を行います。詳しくは、41 ページの『管理、ライセンス』を参照してください。
7. IBM Rational Developer for System z と一緒に組み込まれた追加ソフトウェアをインストールします。詳しくは、61 ページの『付録 A. 追加ソフトウェアのインストール』を参照してください。

概要: HTTP Web サーバーへの Developer for System z の配置

IBM Packaging Utility を使用してインストール・リポジトリを作成することにより、Developer for System z インストール・パッケージと他のオフリング・パッケージを HTTP Web サーバーに配置することができます。これは、Developer for System z 8.5 オフリングおよびそのバンドル・オフリングに加えて、さまざまな数多くのオフリングやサービス更新を単一のリポジトリに置きたい場合に行うと便利です。このリポジトリを使用して、対話式インストールまたはサイレント・インストールを実行できます。

注: HTTP Web サーバー上のリポジトリからサイレント・インストールを実行できますが、この手順はサイレント・インストールの実行に必須ではありません。

パッケージを HTTP Web サーバーに配置するには、IBM Packaging Utility を使用して、新規インストール・リポジトリを作成するか、既存のリポジトリへコピーします。IBM Packaging Utility をインストールして使用するための詳細な手順については、Installation Manager のインフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1r5/index.jsp>) を参照してください。『Packaging Utility でのパッケージの管理』というトピック (http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1r5/topic/com.ibm.cic.auth.ui.doc/topics/c_modes_pu.html) に最新情報があります。

リポジトリを作成すると、以下を行うことができます。

1. 企業内のユーザーに、インストール・リポジトリの URL を提供します。ユーザーは、自分のシステムにインストール・メディアがなくても、リポジトリを指してインストールを実行することができます。
2. リポジトリを使用して、サイレント・インストールを実行します。サイレント・インストールの実行について詳しくは、35 ページの『サイレント・インストール』を参照してください。

ランチパッド・プログラムの使用

Developer for System z ランチパッド・プログラムでは、リリース情報の表示とインストール・プロセスの開始を単一のロケーションで行うことができます。

以下のケースでは、ランチパッド・プログラムを使用して、Developer for System z のインストールを開始します。

- 製品インストール・ディスクからインストールする。
- ワークステーション上の電子イメージからインストールする。
- 共用ドライブ上の電子イメージからインストールする。

インストールをランチパッド・プログラムから開始すると、必要なりポジトリ・ロケーション情報が自動的に構成された状態で、IBM Installation Manager が起動します。このため、Installation Manager の設定で、リポジトリ・ロケーションを手動で設定する必要はありません。

ランチパッドの「*Rational Developer for System z* のインストール」パネルでは、すべてのユーザー用にインストールする（この場合は管理者権限を持っている必要があります）ことに決定することも、現在のユーザー用のみにインストールすることもできます。次に、提供されたリンクのいずれかをクリックして、ガイド付きインストールまたはエキスパート・インストールを開始します。

ガイド付きインストールを選択する代わりに、エキスパート・インストールの実行を選択できます。エキスパート・インストールを選択すると、最も一般的なフィーチャーおよびバンドル・オファリングがデフォルトで選択された状態で、Developer for System z のインストールが起動します。

注: ランチパッド・プログラムからいずれのインストール・オプションを選択した場合も、Installation Manager の「フィーチャー」パネルで追加フィーチャーの選択および選択解除を行うことにより、インストールするフィーチャー・セットをいつでもカスタマイズできます。

ランチパッド・プログラムから Developer for System z のインストールを管理者として開始するには、以下の手順を行います。

1. 1 ページの『プリインストール作業』に記載されているプリインストール作業がまだ完了していなければ、その作業を完了します。
2. インストール・ディスクからインストールする場合は、IBM Rational Developer for System z のインストール・セットアップ・ディスクを、ご使用の DVD ドライブに挿入します。電子イメージからインストールする場合は、RDz85_Setup ディレクトリーを開きます。
3. システムで自動実行が有効になっている場合は、IBM Rational Developer for System z のインストール・セットアップ・ディスクを DVD ドライブに挿入すると、ランチパッド・プログラムが自動的に開始されます。システムで自動実行が有効になっていない場合や、電子イメージからインストールする場合は、ディスクのルートまたは RDz85_Setup ディレクトリーから以下のコマンドを実行してランチパッド・プログラムを開始します。

•

Windows

lanchpad.exe

•

Linux

launchpad.sh

4. 「ようこそ」パネルの情報を読み、左方にある「製品資料」選択を選択すると、選択可能な資料のリストが表示されます。パネルでリンクをクリックして、製品資料を表示します。
5. IBM Rational Developer for System z をインストールするには、左方にある「IBM Rational Developer for System z のインストール」選択をクリックします。すべてのユーザー用にインストールする場合は、「すべてのユーザー用インストール」ラジオ・ボタンをクリックします。現在のユーザー用のみにインストールする場合は、「現在のユーザー用インストール」ラジオ・ボタンをクリックします。ガイド付きインストールまたはエキスパート・インストールのどちらを開始するかを決定して、対応するリンクをクリックします。
6.
 - a. IBM Rational Developer for System z のガイド付きインストールを開始する場合は、「ガイド付きインストールの開始」リンクをクリックします。これにより、Developer for System z のインストール・ウィザードが起動します。このインストール・ウィザードで、希望のフィーチャーを、その対応するボックスにチェック・マークを付けることにより、選択することができます。次に、パネルの下部でリンクをクリックして、ガイド付きインストール（つまりカスタム・インストール）を続行します。
 - b. IBM Rational Developer for System z のエキスパート・インストールを開始する場合は、「エキスパート・インストールの開始」リンクをクリックします。
7. Developer for System z およびインストールすることを選択したバンドル・オファリングのインストールを実行するために、IBM Installation Manager が起動します。「パッケージのインストール」ウィザードのプロンプトに従って、インストールを完了します。詳しくは、『Installation Manager の操作』を参照してください。

注: ランチパッド・パネルの左方に「オプション・ソフトウェアのインストール」選択もあります。以下のようなオプション・ソフトウェアをインストールする場合は、その選択をクリックします。

- TXSeries for Multiplatforms v7.1
- DB2 Connect

Installation Manager の操作

このタスクについて

ランチパッド・プログラム（29 ページの『ランチパッド・プログラムの使用』を参照）から Developer for System z のインストールを起動すると、IBM Installation Manager が開始して、「パッケージのインストール」ウィザードが示されます。以下の手順は、Installation Manager の「パッケージのインストール」ウィザードを使用して Developer for System z をインストールするプロセスです。

手順

1. ウィザードの最初のパネルに、インストールに選択可能なパッケージのリストが表示されます。選択可能なパッケージには、Developer for System z およ

び、ランチパッドでの選択に基づいて推奨されるバンドル・オファリングが含まれます。ランチパッド・プログラムについて詳しくは、29 ページの『ランチパッド・プログラムの使用』を参照してください。選択可能なバンドル・オファリングは、購入した Developer for System z の版によって異なります。

2. IBM Installation Manager の新規バージョンがある場合は、更新するように求めるプロンプトが出されます。プロンプトが出されたら、「はい」をクリックして更新をインストールするか、または後でその新しいバージョンをインストールする場合には、「いいえ」をクリックします。「はい」をクリックすると、Installation Manager は自らを更新して、更新を完了するには再始動する必要がありますことを通知します。

「OK」をクリックして、Installation Manager を再始動します。

3. 「ライセンス」パネルで、選択したパッケージのご使用条件をお読みください。インストールするように選択した各パッケージにご使用条件があります。「ライセンス」パネルの左側にある各パッケージ名をクリックして、対応するご使用条件を表示してください。
 - a. すべてのご使用条件に同意する場合は、「同意する (I accept the terms of the license agreements)」をクリックします。
 - b. 「次へ」をクリックして先に進みます。
4. システムに他のパッケージがインストールされていない場合は、「ロケーション」パネルで、共用リソース・ディレクトリーとして使用するロケーションを選択する必要があります。「共用リソース・ディレクトリー (Shared Resources Directory)」フィールドに、使用する共用リソース・ディレクトリーのパスを入力してください。Developer for System z と一緒に Installation Manager もインストールする場合は、「Installation Manager ディレクトリー」フィールドに、Installation Manager をインストールする場所を入力します。共用リソース・ディレクトリーとして、最大のドライブにあるロケーションを選択するようにしてください。共用リソース・ディレクトリーは、Installation Manager を使用してインストールするすべてのパッケージで使用されます。しかも、最初のパッケージをインストールした後の変更はできません。すでに 1 つ以上のパッケージをシステムにインストール済みの場合は、Installation Manager から、共用リソース・ディレクトリーのロケーションが表示されますが、それを選択または変更するオプションは示されません。

注: 共用リソース・ディレクトリーのロケーションを後で変更するには、すべてのパッケージをアンインストールしてから、新しい共用リソース・ディレクトリーを指定してパッケージを再インストールする必要があります。

選択が終了したら、「次へ」をクリックして先に進みます。

5. 次の「ロケーション」パネルに、Installation Manager から、Developer for System z パッケージを格納する新規パッケージ・グループを作成するか、システム上の既存のパッケージ・グループを使用するかのオプションが示されます。同じパッケージ・グループにパッケージをインストールする場合、それらは共通ワークベンチを共用し、異なるパッケージの機能はそのワークベンチで結合されます。これはシェル共用として知られています。異なるパッケージ・グループにインストールされたパッケージはワークベンチを共用せず、互いに別々に保持されます。

Developer for System z に新規パッケージ・グループを作成するには、以下を行います。

- a. ラジオ・ボタンの「**新規パッケージ・グループの作成**」を選択します。
- b. 新規パッケージ・グループに使用するインストール・ディレクトリーを入力します。このディレクトリーは、パッケージ・グループにインストールされるパッケージに固有のリソースが保管される場所です。システム上に作成するパッケージ・グループごとに、個別のインストール・ディレクトリーを持ちます。このディレクトリーは、異なるパッケージ・グループのパッケージによる共用が可能なリソースがインストールされている共用リソース・ディレクトリーとは異なります。
- c. 64 ビット・オペレーティング・システムにインストールする場合は、32 ビットのパッケージ・グループまたは 64 ビットのパッケージ・グループのいずれを作成するか、「インストール・ディレクトリー」フィールドの下に対応するラジオ・ボタンで選択できます。32 ビットのパッケージ・グループを選択する場合は、インストールされるパッケージは 32 ビット・モードで実行されます。

注: 既存のパッケージ・グループのビット・モードを、パッケージ・グループの作成後に変更することはできません。一部のソフトウェア・パッケージは、32 ビット・モードのみ、または 64 ビット・モードのみをサポートする場合があります、同一のアーキテクチャーで構成されたパッケージ・グループ内にのみインストールすることができます。

Developer for System z を既存のパッケージ・グループにインストールするには、以下を行います。

- a. ラジオ・ボタンの「**既存のパッケージ・グループの使用**」を選択します。
- b. Installation Manager から、システム上の選択可能なパッケージ・グループのリストが表示されます。Developer for System z のインストール先にするパッケージ・グループを選択します。Installation Manager は、選択されたパッケージ・グループが Developer for System z と互換性のあることを検証します。互換性がない場合は、問題を知らせるエラー・メッセージが Installation Manager から表示されます。互換性のあるパッケージ・グループを選択するか、または新規パッケージ・グループの作成を選択するまで、インストールを続行することはできません。

選択が終了したら、「次へ」をクリックして先に進みます。

6. 次の「**ロケーション**」パネルで、システムにすでにインストールされている既存の Eclipse IDE を拡張して、インストールするパッケージ内の機能を追加することを選択できます。このオプションを選択するには、IBM Java Development Kit (JDK) バージョン 1.6 以上を使用する Eclipse バージョン 3.6.2 が必要です。Eclipse と JDK は、既存のものを拡張するのではなく、Developer for System z と一緒にパッケージされたものを使用することをお勧めします。
 - 既存の Eclipse IDE を拡張しない場合は、「次へ」をクリックして先に進みます。
 - 既存 Eclipse IDE を拡張するには、以下を行います。
 - a. 「**既存の Eclipse を拡張 (Extend an existing Eclipse)**」を選択します。

- b. 「**Eclipse IDE**」フィールドに、Eclipse 実行可能ファイル (Windows では eclipse.exe、Linux では eclipse) が入ったフォルダーのロケーションを入力するか、またはそのロケーションまでナビゲートします。
Installation Manager によって、Eclipse IDE バージョンが、インストールするパッケージに有効であるかが検査されます。「**Eclipse IDE JVM**」フィールドに、指定した IDE の Java 仮想マシン (JVM) が表示されます。
 - c. 「次へ」をクリックして先に進みます。
7. 「**フィーチャー**」ページの「**翻訳版 (Translations)**」の下で、このパッケージ・グループのためにインストールする言語を選択します。Developer for System z のユーザー・インターフェースおよびドキュメンテーションに対応する各国語翻訳がインストールされます。

注: この選択は、このパッケージ・グループにインストールされるすべてのパッケージに適用されます。

注: このリリースの Developer for System z では、使用可能な言語のいずれかを選択すると、インストールされるすべての言語の各国語翻訳ができます。

8. 次の「**フィーチャー**」ページで、Developer for System z およびインストールするバンドル・オファリング用にインストールするフィーチャーを選択します。インストール・プロセスの開始時にランチパッドからガイド付きインストールを選択した場合、フィーチャー・セットは、インストール・ウィザードでの質問の回答に基づき、デフォルトで選択されます。フィーチャーの名前をクリックして、そのフィーチャーの記述を表示することができます。フィーチャーの記述は、パネル下部にある「**詳細**」セクションに表示されます。Developer for System z の使用可能なフィーチャーについて詳しくは、12 ページの『フィーチャーのインストール』を参照してください。Developer for System z にバンドルされているオファリングの使用可能なフィーチャーについては、それらのオファリングの資料を参照してください。

インストールするフィーチャーの選択が終了したら、「次へ」をクリックします。

9. 「ヘルプ・システム構成 (help system configuration)」ページ上で、以下のオプションのうち 1 つを選択してから、「次へ」をクリックします。
- **Web からヘルプにアクセスする方法**
 - **ヘルプをダウンロードしてコンテンツにローカルでアクセスする方法**
 - **イントラネット上のサーバーからヘルプにアクセスする方法**
10. z/OS 接続パネルでは、新規ワークスペースを使用して初めて Developer for System z ワークベンチを起動するときに作成されるリモート z/OS 接続をオプションで構成できます。Developer for System z はサーバーに接続して、ワークベンチの構成設定を自動的に取得します。これは、各クライアントを個別に構成することなく、共通の構成設定を複数のユーザーにロールアウトするのに役立ちます。

このフィーチャーについて詳しくは、「Developer for System z ホスト構成リファレンス」(SA88-4226) の『クライアントへのプッシュ機能に関する考慮事項』を参照してください。

デフォルトでは、z/OS 接続構成は使用不可になっています。 z/OS 接続を構成しない場合は、「**z/OS 接続をすぐに構成する**」チェック・ボックスのチェック・マークを外した状態にしておき、「次へ」をクリックしてインストールを続行します。このフィーチャーを使用可能にして z/OS 接続設定を入力するには、以下のステップを実行します。

- a. 「**z/OS 接続をすぐに構成する**」チェック・ボックスを選択します。
 - b. 「**ホスト名**」フィールドに Developer for System z サーバーのホスト名を入力します。
 - c. 「**接続名**」フィールドで、この接続に使用する名前を Developer for System z の「リモート・システム」ビューに入力します。
 - d. サーバー認証方式に「**userid/password**」または「**certificate**」を選択します。
 - e. Developer for System z サーバーのデーモン・ポートを「**デーモン・ポート**」フィールドに入力します。
 - f. 「次へ」をクリックして、インストールを続行します。新規ワークスペースを使用して初めて Developer for System z ワークベンチを起動するときに、z/OS 接続が構成されます。
11. インストールを開始する前に、「**要約**」パネルで選択項目を確認します。前のパネルで選択した項目を変更する場合は、「**戻る**」をクリックして変更します。インストールの選択項目が適切である場合は、「**インストール**」をクリックしてパッケージをインストールします。インストールが開始され、進行標識にインストールが完了したパーセンテージが示されます。
 12. インストール・プロセスが完了すると、インストールの成功を確認するためのメッセージが表示されます。

現行セッションのインストール・ログ・ファイルを表示するには、「**ログ・ファイルの表示**」をクリックしてインストール・ログを新しいウィンドウで開きます。

13. 必要に応じて、Installation Manager の「**ライセンスの管理**」パネルで、インストール済みの Developer for System z および他のバンドル・オフオファリングのライセンスを構成します。これには、フローティング・ライセンス・サポートの設定、あるいは永続または期限付きライセンス・キーをインストールするための製品アクティベーション・キットのインストールなどがあります。詳しくは、41 ページの『管理、ライセンス』を参照してください。

サイレント・インストール

このタスクについて

Developer for System z は、サイレント・モードでインストールすることができます。Installation Manager をサイレント・モードで実行すると、そのユーザー・インターフェースが使用不可になるため、代わりに応答ファイルを使用して、パッケージのインストールに必要なコマンドを入力します。

サイレント・モードで Installation Manager を実行すると、バッチ・プロセスを使用して、スクリプトによりパッケージをインストール、更新、変更、およびアンインストールできるので、便利です。

サイレント・インストールには次の 3 つのメインタスクがあります。

1. インストール・イメージを共用ドライブまたはサーバー上のロケーションにコピーする (サイレント・インストールを複数のシステムで実行する計画の場合)
2. 応答ファイルを作成する
3. **Installation Manager** をサイレント・インストール・モードで実行する

以下の各セクションでは、インストール・イメージを共用ドライブまたはサーバーにコピーする操作について説明します。残りの操作 (応答ファイルを作成し、サイレント・モードで **Installation Manager** を実行してパッケージをインストールする操作) の最新情報については、**Installation Manager** のインフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1r5/index.jsp>) を参照してください。

『サイレント・モードでの作業』というトピック (http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1r5/topic/com.ibm.silentinstall12.doc/topics/t_silentinstall_overview.html) にこれらの操作に関する詳細情報があります。

共用ドライブまたはサーバーへのインストール・イメージのコピー このタスクについて

サイレント・インストールを複数のシステムで実行する計画の場合は、インストール・イメージを、イントラネット内の他のシステムがアクセスできるように共用ドライブ上のロケーションにコピーする必要があります。

インストール・イメージを物理インストール・ディスクから共用ロケーションにコピーするには、以下の手順を行います。

1. *IBM Rational Developer for System z* インストール・ディスク を、ご使用の DVD ドライブに挿入します。
2. *IBM Rational Developer for System z* インストール・ディスク の内容を、インストール・イメージを保管する共用ロケーションにコピーします。
3. *Developer for System z* にバンドルされている他のオフファリングをサイレント・インストール可能にする場合は、それらのオフファリングに対して、前述のプロセスを実行する必要があります。
 - a. バンドル・オフファリング・インストールが 1 枚のインストール・ディスクに収録されている場合は、そのインストール・ディスクの内容を、ステップ 1 で作成したディレクトリーにコピーします。バンドル・オフファリングが複数のインストール・ディスクに入っている場合は、以下のステップを実行します。
 - 1) バンドル・オフファリングの製品インストール・ファイルを格納するための新規ディレクトリーを共用ロケーションに作成します。このディレクトリーには、任意の名前を選択して付けることができます。
 - 2) 製品インストール・ファイルを格納するために作成したディレクトリー内に、インストール・ディスクごとに `diskN` ディレクトリーを作成します。N は、インストール・ディスクの番号に対応します。各インストール・ディスクの内容を、そのディスク用に作成した対応する `diskN` ディレクトリーにコピーします。

4. インストール・ディスクの内容を共用ロケーションにコピーし終えたら、応答ファイルの作成およびサイレント・インストールの実行を開始することができます。

インストール・イメージを電子イメージから共用ロケーションにコピーするには、以下の手順を行います。

1. サイレント・インストール可能にするバンドル・オファリングおよび **Developer for System z** のダウンロードした圧縮ファイルそれぞれを、イメージを保管する共用ロケーションに解凍します。代わりに、圧縮ファイルをローカル・マシンに解凍してから、その解凍ファイルおよびディレクトリーを共用ロケーションにコピーすることもできます。
2. 共用ロケーションで、以下が揃っていることを確認します。
 - a. 共用ディレクトリーのルートに、以下のディレクトリーが必要です。
 - RDz85_Setup
 - RDz85 または RDz85Ent
 - サイレント・インストール可能にするバンドル・オファリングごとに 1 つのディレクトリー。選択可能なバンドル・オファリングは、購入した **Developer for System z** の版によって異なります。
 - b. **RDz85** または **RDz85Ent** ディレクトリー、および共用ロケーションにコピーしたバンドル・オファリングごとのディレクトリーに、1 つ以上の diskN ディレクトリーが必要で、製品のインストール・ディスク 1 枚に 1 つのディレクトリーが対応します。
3. 共用インストール・イメージのディレクトリー構造を確認し終えたら、応答ファイルの作成およびサイレント・インストールの実行の準備が整っています。

代わりに、インストール・イメージを HTTP Web サーバー上のリポジトリーにコピーし、そのリポジトリーを使用してサイレント・インストールを実行できます。リポジトリーを作成するには、**IBM Packaging Utility** を使用する必要があります。詳しくは、29 ページの『概要: HTTP Web サーバーへの **Developer for System z** の配置』を参照してください。

第 6 章 ポストインストール作業

ヘルプ・コンテンツの構成

デフォルトのヘルプ配信では、Web からコンテンツを動的に取得します。このリモート・ヘルプでは、製品内から常に最新のコンテンツを利用できます。ご使用のコンピュータに、ヘルプ・コンテンツをローカルにインストールすることもできます。

ヘルプのインストールおよび構成に関する追加情報は、ヘルプ・コンテンツの構成 (http://pic.dhe.ibm.com/infocenter/ratdevz/v8r5/index.jsp?topic=%2Fcom.ibm.help.common.rational.remote.doc%2Ftopics%2Ft_configuring_help.html) を参照してください。

ヘルプ・コンテンツをローカルにインストールする方法については、次のいずれかのトピックを参照してください。

- ヘルプ・アップデーター・サイトからヘルプ・コンテンツをダウンロードする
(http://pic.dhe.ibm.com/infocenter/ratdevz/v8r5/index.jsp?topic=%2Fcom.ibm.help.common.rational.remote.doc%2Ftopics%2Ft_download_help_update_site.html)
- ヘルプ・ダウンロード・サイトからヘルプ・コンテンツをダウンロードする
(http://pic.dhe.ibm.com/infocenter/ratdevz/v8r5/index.jsp?topic=%2Fcom.ibm.help.common.rational.remote.doc%2Ftopics%2Ft_download_help_download_site.html)

注: ヘルプ・ダウンロード・サイトからのヘルプ・コンテンツのダウンロードでは、Rdz85_updateSite.zip ファイルを使用します。インターネットにアクセスできない場合は、Developer for System z セットアップおよびインストール・ディスク、ならびに Developer for System z クイック・スタート・ディスクの documentation¥help フォルダにある documentation¥help ファイルを使用することもできます。

EXEC CICS、EXEC SQL、EXEC DLI の各ステートメントのコンテンツ・アシストを有効にする操作

EXEC CICS、EXEC SQL、EXEC DLI の各ステートメントのコンテンツ・アシストを有効にするには、IMS インフォメーション・センターと CICS インフォメーション・センターにアクセスする必要があります。

これらのインフォメーション・センターのオンライン版は、以下の場所にあります。

CICS: <http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/cicsts/v4r2/index.jsp>

IMS: <http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dzichelp/v2r2/index.jsp>

IMS インフォメーション・センターと CICS インフォメーション・センターをローカル・マシンやイントラネット・サーバーにインストールすることもできます。IMS インフォメーション・センターを入手し、インストールし、初期化するための情報については、『Information Management Software for z/OS Solutions (IMS) インフォメーション・センターのインストールと初期化』を参照してください。CICS インフォメーション・センターを入手し、インストールし、初期化するための情報については、41 ページの『CICS Transaction Server バージョン・インフォメーション・センターのインストールと初期化』を参照してください。

Information Management Software for z/OS Solutions (IMS) インフォメーション・センターのインストールと初期化

Information Management Software for z/OS Solutions インフォメーション・センターは、Microsoft Windows XP Professional システムに対応したインストール可能なインフォメーション・センターとして用意されています。インストール可能なインフォメーション・センターは、ローカル・システムでもイントラネットの Windows でも実行できます。

Information Management for z/OS Solutions インフォメーション・センター DVD (SK5T-7377) は、IBM Publication Center から低価格で注文できます。インストール可能なインフォメーション・センターは、英語版だけの対応になっています。国や地域によっては、注文できない可能性があります。Information Management for z/OS Solutions インフォメーション・センター DVD を注文するには、以下のようになります。

1. IBM Publications Web サイトにアクセスします。
2. ドロップダウン・メニューから国、地域、言語を選択して、「Go」をクリックします。
3. 次に表示されるページで「Search for publications」を選択します。
4. 「Quick Publications Center search」ページの「Publication number」フィールドに SK5T-7377 と入力して、「Go」をクリックします。

IMS インフォメーション・センター DVD を受け取ってインフォメーション・センターをインストールしたら、インフォメーション・センターに用意されている手順を実行して最新の更新を取得してください。

注: IMS インフォメーション・センターをインストールするときに、DB2 と IMS の最新トピックだけを選択してインストールすることもできます。EXEC SQL ステートメントと EXEC DLI ステートメントのコンテンツ・アシストを有効にするために必要なのは、これらのトピックだけです。

注: IMS インフォメーション・センターは、Microsoft Windows 版だけが用意されています。Linux、UNIX、AIX を使用している場合は、オンライン版のインフォメーション・センターを使用するか、イントラネットでアクセスできる Microsoft Windows のサーバーにインストールしてください。

EXEC SQL ステートメントと EXEC DLI ステートメントのコンテンツ・アシストを有効にするには、インフォメーション・センターのインストール場所へ移動し、IC_start.bat を実行してインフォメーション・センターを初期化します (このルーチンを実行すると、ポート 8801 でインフォメーション・センターが初期化されま

す)。コンテンツ・アシストでヘルプ情報を検索できるようにするには、ポート 8801 でインフォメーション・センターを初期化する必要があります。

注: 「スタート」メニューのショートカットを使用して IMS インフォメーション・センターを初期化すると、ポート番号がランダムに割り当てられます。「スタート」メニューに用意されているショートカットを使用した場合は、コンテンツ・アシストで該当資料を見つけて表示することができなくなります。

IMS インフォメーション・センターを開くには、IC_start.bat の実行後にブラウザで <http://127.0.0.1:8801/help/index.jsp> にリンクします。

CICS Transaction Server バージョン・インフォメーション・センターのインストールと初期化

CICS Transaction Server バージョン・インフォメーション・センターは、Microsoft Windows、Linux、AIX の環境で実行できます。IBM Publications Center にプラットフォームごとのパッケージが用意されています。各パッケージには、ワークステーションまたはサーバーでインフォメーション・センターを実行するために必要なすべての Eclipse コードと CICS 資料が含まれています。

CICS インフォメーション・センターをダウンロードするには、以下のようになります。

1. IBM Publications Center Web サイト (<http://www.ibm.com/e-business/linkweb/publications/servlet/pbi.wss>) にアクセスします。
2. 「Search for publications」をクリックして、該当する資料番号を入力します。
SK4T-2664 CICS Transaction Server Version Information Center for AIX
SK4T-2665 CICS Transaction Server Version Information Center for Linux
SK4T-2666 CICS Transaction Server Version Information Center for Windows
3. インフォメーション・センター・パッケージをダウンロードします。
4. パッケージを解凍し、README ファイルの説明に従ってインフォメーション・センターをインストールします。各パッケージは、.zip ファイルとして圧縮されています。この .zip ファイルには、Linux、AIX、z/OS に対応した正しい圧縮ファイル形式の内容が含まれています。

インフォメーション・センターをインストールしたら、インフォメーション・センターに用意されている手順を実行して最新の更新を取得してください。

EXEC CICS ステートメントのコンテンツ・アシストを有効にするには、インフォメーション・センターのインストール場所に移動し、IC_start.bat を実行してインフォメーション・センターを初期化します。CICS インフォメーション・センターを開くには、IC_start.bat の実行後に help_cd_start.bat を実行するか、ブラウザで <http://127.0.0.1:9999/help/index.jsp> にリンクします。

管理、ライセンス

インストールした IBM ソフトウェアとカスタマイズしたパッケージのライセンスは、IBM Installation Manager の「ライセンスの管理」ウィザードを使用して管理されます。「ライセンスの管理」ウィザードは、ライセンス情報を表示して、インストール済みパッケージごとに、ライセンス構成タスクを実行できるようにします。

一部の Rational 製品に付属する試用版ライセンスは、インストール後、30 日または 60 日経過すると有効期限が切れます。有効期限後も製品を使用するには、その製品をアクティブ化する必要があります。「ライセンスの管理」ウィザードを使用すると、製品アクティベーション・キットをインポートすることにより、試用版オフラインをライセンス版にアップグレードすることができます。また、試用版ライセンスまたは永続ライセンスのオフラインに対して、フローティング・ライセンスの適用を有効にして、ライセンス・サーバーからフローティング・ライセンス・キーを使用することもできます。

- Rational 製品のライセンスの管理について詳しくは、Rational ライセンス・サポート・ページ (<http://www-306.ibm.com/software/rational/support/licensing/>) を参照してください。

許可ユーザー・ライセンス

IBM Rational 許可ユーザー・ライセンスは、特定の単一の個人に、Rational ソフトウェア製品の使用を許可します。購入者は、何らかの形で製品にアクセスする個々のユーザーごとに、許可ユーザー・ライセンスを取得する必要があります。許可ユーザー・ライセンスは、購入者が長期的または永続的に、元の譲受人を置き換えない限り、再割り当てすることはできません。

例えば、許可ユーザー・ライセンスを 1 つ購入した場合は、そのライセンスを特定の個人 1 名に割り当てることができ、その人が対応する Rational ソフトウェア製品を使用できます。許可ユーザー・ライセンスは、ライセンスを受けた人が積極的に使用しない場合であっても、いかなる時点においても、別の人にその製品の使用権を与えるものではありません。

フローティング・ライセンス

IBM Rational フローティング・ライセンスは、複数のチーム・メンバー間で共有が可能な単一ソフトウェア製品に対するライセンスです。ただし、同時ユーザーの総数は、購入フローティング・ライセンスの数を超えてはなりません。例えば、Rational ソフトウェア製品に 1 つのフローティング・ライセンスを購入した場合、組織内の任意のユーザーが任意のある時点でその製品を使用していることがあります。その製品にアクセスしたい別の人は、現行ユーザーがログオフするまで待たなければなりません。

フローティング・ライセンスを使用するには、フローティング・ライセンス・キーを取得して、それを Rational ライセンス・サーバーにインストールする必要があります。サーバーはエンド・ユーザーのライセンス・キーへのアクセス要求に応答します。アクセスが認可されるのは、組織で購入したライセンス数に一致する数の同時ユーザーです。

注: Rational Developer for System z でフローティング・ライセンス (トークン・ライセンスを含む) を使用する場合は、製品をインストールする前にライセンス・キー・サーバーを Rational License Key Server バージョン 8.1.2 にアップグレードする必要があります。Rational License Key Server バージョン 8.1.2 は製品の以前のバージョンでも使用できます。Rational License Key Server の v7.1.x 以前を v8.1.2 にアップグレードする方法については、『[Migrating to Rational Common Licensing](http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/rational/v0r0m0/index.jsp?topic=/com.ibm.rational.license.doc/topics/r_migration.html)』 (http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/rational/v0r0m0/index.jsp?topic=/com.ibm.rational.license.doc/topics/r_migration.html) を参照してください。

トークン・ライセンス

トークン・ベースのライセンス・モデルは、一定数のトークン・ライセンスを購入できることを意味します。トークン・ベースのフィーチャー (FEATURE) をチェックアウトする Rational ツールを使用した場合は、ライセンス・ファイルのフィーチャー (FEATURE) 行により、チェックアウトされるトークンの数が指定されます。

トークン・ベースのライセンスは、フローティング・ライセンスでしか使用できません。許可ユーザー・ライセンスには使用できません。

注: Rational Developer for System z でフローティング・ライセンス (トークン・ライセンスを含む) を使用する場合は、製品をインストールする前にライセンス・キー・サーバーを Rational License Key Server バージョン 8.1.2 にアップグレードする必要があります。Rational License Key Server バージョン 8.1.2 は製品の以前のバージョンでも使用できます。Rational License Key Server の v7.1.x 以前を v8.1.2 にアップグレードする方法については、『Migrating to Rational Common Licensing』(http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/rational/v0r0m0/index.jsp?topic=/com.ibm.rational.license.doc/topics/r_migration.html) を参照してください。

トークン・ライセンス交付の詳細については、最寄りの IBM 営業担当員にお尋ねください。

ライセンスの使用可能化

Rational ソフトウェア製品を初めてインストールする場合、または製品の使用を継続するためにライセンスの延長を希望する場合、該当の製品のライセンスを使用可能にする方法は複数あります。

Rational Software Development Platform オファリングのライセンスは、以下の 2 通りの方法で使用可能にされます。

- 製品アクティベーション・キットをインポートする
- Rational Common Licensing を有効にして、フローティング・ライセンス・キーにアクセスできるようにする

注: 一部の Rational 製品に付属する試用版ライセンスは、インストール後、30 日または 60 日経過すると有効期限が切れます。有効期限後も製品を使用するには、その製品をアクティブ化する必要があります。

アクティベーション・キット

製品アクティベーション・キットには、試用版 Rational 製品の永続ライセンス・キーまたは期限付きライセンス・キーが含まれています。アクティベーション・キットを購入し、アクティベーション・キットの .zip ファイルをローカル・マシンにダウンロードしてから、アクティベーション・キットの .jar ファイルをインポートし、ご使用の製品のライセンスを使用可能にします。アクティベーション・キットを製品にインポートするには、IBM Installation Manager を使用します。

フローティング・ライセンスの適用

必要に応じて、フローティング・ライセンス・キーを取得し、IBM Rational ライセンス・サーバーをインストールして、ご使用の製品に対するフローティング・ライセンスの適用を有効にできます。フローティング・ライセンスを適用することには、以下の利点があります。

- 組織全体にわたりライセンス準拠が適用される
- ライセンス購入数が少なく済む
- IBM Rational Team Unifying and Software Development Platform デスクトップ製品のライセンス・キーを同一ライセンス・サーバーから提供できる

アクティベーション・キットおよびフローティング・ライセンスの取得について詳しくは、46 ページの『ライセンスの購入』を参照してください。

インストール済みパッケージのライセンス情報の表示

このタスクについて

インストール済みパッケージのライセンス情報は、ライセンス・タイプおよび有効期限を含めて、IBM Installation Manager から確認することができます。

ライセンス情報を表示するには、以下の手順を行います。

1. IBM Installation Manager を開始します。
2. 「メイン」ページで「ライセンスの管理」をクリックします。

パッケージ・ベンダー、現在のライセンス・タイプ、および有効期限は、インストール済みパッケージごとに表示されます。

製品アクティベーション・キットをインポートする

このタスクについて

永続ライセンス・キーまたは期限付きライセンス・キーをインストールするには、アクティベーション・キットをダウンロード場所または製品メディアから IBM Installation Manager を使用してインポートする必要があります。

アクティベーション・キットを購入していない場合は、最初にそれを購入する必要があります。製品または製品アクティベーション・キットを購入している場合は、該当するディスクを挿入するか、またはアクティベーション・キットを IBM パスポート・アドバンテージから、アクセス可能なワークステーションにダウンロードします。アクティベーション・キットは、Java アーカイブ(.jar) ファイルとしてパッケージされています。.jar ファイルは永続ライセンス・キーを含みます。このファイルをインポートして、ご使用の製品をアクティブ化する必要があります。

アクティベーション・キット .jar をインポートして、新しいライセンス・キーを有効にするには、以下の手順を行います。

1. IBM Installation Manager を開始します。
2. 「メイン」ページで「ライセンスの管理」をクリックします。
3. パッケージを選択し、「アクティベーション・キットのインポート」ボタンをクリックします。

4. 「次へ」をクリックします。現在のライセンスの種類、およびライセンスのバージョン範囲など、選択したパッケージの詳細が表示されます。
5. メディア・ディスクまたはアクティベーション・キットのダウンロード・ロケーションのパスを参照し、該当する Java アーカイブ (.jar) ファイルを選択して、「開く」をクリックします。
6. 「次へ」をクリックします。「要約 (Summary)」ページに、アクティベーション・キットのターゲット・インストール・ディレクトリー、新規ライセンスの適用される製品、およびバージョン情報が表示されます。
7. 「完了」をクリックします。

永続ライセンス・キーを含む製品アクティベーション・キットが製品にインポートされます。「ライセンスの管理」ウィザードが、インポートが正常に終了したかどうかを示します。

フローティング・ライセンスの使用可能化

このタスクについて

チーム環境がフローティング・ライセンスの適用をサポートしている場合は、ご使用の製品のフローティング・ライセンスを使用可能にして、フローティング・ライセンス・キーにアクセスできるように接続を構成することができます。

フローティング・ライセンスの適用を有効にする前に、管理者からライセンス・サーバー接続情報を入手する必要があります。ライセンス・サーバー、ライセンス・キー、および Rational Common Licensing による管理について詳しくは、「*IBM Rational License Management Guide*」を参照してください。

指定されたパッケージのライセンス・タイプとしてフローティング・ライセンスを使用可能にして、ライセンス・サーバー接続を構成するには、以下を行います。

1. Rational Software Development Platform の IBM Installation Manager で、「ファイル」->「開く」->「ライセンスの管理」をクリックします。
2. パッケージのバージョンを選択し、「フローティング・ライセンス・サポートの設定」ボタンを選択します。
3. 「次へ」をクリックします。
4. 「フローティング・ライセンスの適用を有効にする」ボタンをクリックします。
5. 1 つ以上のライセンス・サーバー接続を以下のように構成します。
 - a. 「サーバー」テーブルで空のフィールドをクリックするか、または「追加」ボタンをクリックします。
 - b. 管理者から代替サーバー環境に関する情報を受け取った場合は、「代替サーバー」ボタンをクリックします。1 次サーバー、2 次サーバー、および 3 次サーバーの名前とポートのフィールドが表示されます。
 - c. 「名前」フィールドにライセンス・サーバーのホスト名を入力します。
 - d. (オプション) ファイアウォールが使用される環境の「ポート」フィールドに値を入力します。管理者から指示されない限り、このポートには値を割り当てないでください。
 - e. 代替サーバー環境の場合は、2 次サーバーおよび 3 次サーバーの名前と (必要ならば) ポートを入力します。

- f. (オプション) 「**接続のテスト**」 ボタンをクリックして、接続情報が正しいこと、およびサーバーが使用可能であることを確認できます。
 - g. 「**OK**」 をクリックします。
6. 「**次へ**」 をクリックします。
 7. (オプション) シェル共有パッケージまたはカスタム・パッケージのライセンス使用順序を構成します。リストのライセンスの順序は、ご使用のパッケージが、特定のライセンス・パッケージのライセンス・キーへのアクセスを試みる順序を決定します。
 8. 「**完了**」 をクリックします。

「ライセンスの管理」ウィザードが、フローティング・ライセンスの構成が正常に終了したかどうかを示します。

ここで、有効になった製品を次に開くと、使用可能なフローティング・ライセンス・キーのプールからライセンス・キーを取得するために、ライセンス・サーバーとの間に接続が作成されます。

ライセンスの購入

このタスクについて

現行製品ライセンスの期限切れが近づいている場合、またはチーム・メンバー用に製品ライセンスを追加で取得したい場合、新規ライセンスを購入できます。

ライセンスを購入して、ご使用の製品を有効にするには、以下の手順を完了します。

1. 購入したいライセンスのタイプを決定します。
2. ibm.com® にアクセスするか、IBM 営業担当員に連絡を取って、製品ライセンス製品を購入します。詳しくは、ソフトウェアのご注文方法 に関する IBM Web ページを参照してください。
3. 購入するライセンスのタイプに応じて、受け取ったライセンス証書を使用し、以下のいずれかを行って、ご使用の製品を有効にします。
 - ご使用する製品の許可ユーザー・ライセンスを購入する場合は、*Passport Advantage* にアクセスし、そこの指示に従って、製品アクティベーション・キット・ファイルをダウンロードします。アクティベーション・キットをダウンロードしたら、製品アクティベーション .jar ファイルを *Installation Manager* を使用してインポートする必要があります。
 - ご使用する製品のフローティング・ライセンスを購入する場合は、*IBM Rational Licensing and Download* サイト へのリンクをクリックし、ログインして (IBM への登録が必要)、IBM Rational ライセンス・キー・センターに接続するためのリンクを選択します。これで、ライセンス証書を使用して、ライセンス・サーバーのフローティング・ライセンス・キーを取得することができます。

必要に応じて、*Passport Advantage* にもアクセスし、ご使用の製品のアクティベーション・キットをダウンロードすることができます。アクティベーショ

ン・キットのインポート後、PC を長期間、オフライン状態で使用する場合には、ライセンス・タイプをフローティングから永続へと切り替えることができません。

アクティベーション・キットをインポートしたい場合、またはご使用の製品にフローティング・ライセンス・サポートを有効にしたい場合には、IBM Installation Manager の「ライセンスの管理」ウィザードを使用します。

ライセンスのサイレント・インストールおよび設定

製品ライセンスをインポートして、サイレントにフローティング・ライセンス・サポートを設定できます。これは、パッケージをサイレントにインストールできるのと同じように行えます。ライセンス構成タスクを実行するために、IBM Installation Manager が使用する応答ファイルを作成する必要があります。応答ファイルの記録、およびサイレント・インストールの実行について詳しくは、35 ページの『サイレント・インストール』を参照してください。応答ファイルを記録する場合は、「ライセンスの管理」パネルを使用して、アクティベーション・キットをインポートするか、フローティング・ライセンス・サポートの設定を行ってから、Installation Manager を終了します。これらのタスクをサイレントに実行するために必要な情報が応答ファイルに書き込まれます。

Linux コンピューター上でのファイル・ハンドル数の増加

最高の製品パフォーマンスを得るために、ファイル・ハンドル数をデフォルトの 1024 ハンドルよりも増やします。

始める前に

重要: Rational 製品で作業する前に、ファイル・ハンドル数を増やしてください。大部分の Rational 製品は、プロセスごとに 1024 ファイル・ハンドルというデフォルトの制限よりも多いファイル・ハンドルを使用します。システム管理者は、この変更を行う必要がある場合があります。

このタスクについて

必ず、以下の手順を正しく完了します。この手順が正しく完了されない場合は、コンピューターは始動しません。

Linux コンピューター上でファイル・ハンドル数を増やすには、以下の手順を完了します。

手順

1. root としてログインします。root アクセス権を持っていない場合は、続行する前に取得する必要があります。
2. etc ディレクトリーに変更します。

重要: 次のステップでファイル・ハンドル数を増やすことに決定した場合は、空の `initscript` ファイルをコンピューター上に残さないでください。残した場合、次にリスタートしたときに、コンピューターは始動しません。

3. vi エディターを使用して、etc ディレクトリー内の initscript ファイルを編集します。このファイルが存在しない場合は、vi initscript と入力して、作成します。
4. 1 行目で、ulimit -n 4096 と入力します。ポイントは、4096 が大部分の Linux コンピューターのデフォルトの 1024 よりも著しく大きいことです。

重要: ハンドル数にあまり大きな値を設定しないでください。そのような設定をすると、システム全体のパフォーマンスに悪影響を与える可能性があるからです。

5. 2 行目で、eval exec "\$4" と入力します。
6. ステップ 4 と 5 を完了したことを確認してから、ファイルを保存し、閉じます。
7. オプション: etc/security ディレクトリー内の limits.conf ファイルを変更することにより、ユーザーまたはグループが使用可能なハンドルの数を制限します。このファイルがない場合は、前の手順のステップ 4 で、より小さい数 (2048 など) を使用することを検討してください。プロセス当たり許可されるオープン・ファイルの数に対する制限が、大部分のユーザーにとって十分に小さいものになるように、これを行ってください。ステップ 4 で、比較的小さい数を使用した場合は、これを行うことはそれほど重要ではありません。しかし、ステップ 4 で大きい数を設定しておいて、limits.conf ファイルに制限を設定しない場合はコンピューターのパフォーマンスが著しく低下する可能性があります。

以下のサンプル limits.conf ファイルでは、すべてのユーザーを制限してから、後でそれ以外の制限を設定します。このサンプルでは、ステップ 4 で、ハンドルの数を 8192 に設定したと想定しています。

```
*      soft nfile 1024
*      hard nfile 2048
root   soft nfile 4096
root   hard nfile 8192
user1  soft nfile 2048
user1  hard nfile 2048
```

上記例での「*」は、まず、すべてのユーザーに制限を設定することに注意してください。この制限は、後に続く制限よりも小さい制限です。root ユーザーに許可されるオープン・ハンドルの数の方が大きくなっています。一方、user1 が使用可能な数はその 2 つの間です。変更を行う前に、必ず、limits.conf ファイル内のドキュメンテーションを読んで、理解してください。

Linux オペレーティング・システムの追加構成要件

Linux オペレーティング・システムを使用する場合は、ご使用のコンピューターがこのトピックにリストされている要件を満たしていることを確認する必要があります。

64 ビットのシステムでは 32 ビットの xulrunner パッケージが必要

64 ビットの Linux システムで Developer for System z が 32 ビットのパッケージ・グループにインストールされている場合は、32 ビット版の xulrunner パッケージ

ジをインストールする必要があります。このパッケージがインストールされていないと、製品を実行したときに以下のエラー・メッセージが表示されることがあります。

```
org.eclipse.swt.SWTErrors: No more handles  
[Unknown Mozilla path (MOZILLA_FIVE_HOME not set)]
```

通常は、Linux ディストリビューションと一緒にインストールされるパッケージ・マネージャーを使用して、32 ビットの xulrunner パッケージを見つけてインストールできます。(例えば、Red Hat Linux では YUM、SUSE Linux では YaST を使用できます。) 別の方法としては、Linux ディストリビューションの更新サイト、32 ビットの Linux ディストリビューション・ディスク (使用可能な場合)、他の RPM パッケージ配布ソースのいずれかから 32 ビットの xulrunner RPM をダウンロードし、**rpm** コマンドでインストールすることもできます。以下に、その例を示します。

```
rpm -Uvh <xulrunner module name>
```

Firefox または Mozilla ブラウザー用の環境変数の設定が必要な場合がある

環境変数 MOZILLA_FIVE_HOME を Firefox または Mozilla インストールが含まれるフォルダーに設定する必要がある場合があります。例えば、**setenv** MOZILLA_FIVE_HOME /usr/lib/firefox-1.5 のように設定します。

この環境変数を設定しないと、製品の実行時に以下のエラー・メッセージが表示される場合があります。

```
org.eclipse.swt.SWTErrors: No more handles  
[Unknown Mozilla path (MOZILLA_FIVE_HOME not set)]
```

Firefox ブラウザーは動的にリンクされる必要がある

SWT ブラウザー・ウィジェットをサポートするには、Firefox ブラウザーは動的にリンクされていなければなりません。つまり、ブラウザーは mozilla.org からダウンロードされたのではなく、ソースからコンパイルされたということです。通常、Firefox がディストリビューションの一部として提供された (つまり、/usr/lib/firefox などの場所にある) 場合が、これに当たります。

これが当てはまることを確認する 1 つの方法として、そのブラウザーが /etc/gre.conf によって指されているブラウザーであるかどうかを調べます。この gre.conf ファイルの目的は、組み込み可能ブラウザーを指すことです。

ご使用のブラウザーが動的にリンクされていないと、製品の実行時に以下のエラー・メッセージが表示されることがあります。

```
org.eclipse.swt.SWTErrors: No more handles  
(java.lang.UnsatisfiedLinkError:  
/home/n0002466/.eclipse/ibm.software.development.platform_7.0.0  
/configuration/org.eclipse.osgi/bundles/267/1/.cp/libswt-mozilla-gtk-3236.so  
(libxpcom.so: cannot open shared object file: No such file or directory))  
SUSE Linux might require a fix for invisible text problem.))
```

テキストが表示されない問題に対するフィックスが SUSE Linux で必要な場合がある

ご使用のオペレーティング・システムが SUSE Linux Enterprise Desktop 10 SP1 または SUSE Linux Enterprise Server 10 SP1 の場合、エディターによってはテキストが表示されないという問題を解決するため、以下のオペレーティング・システム更新が必要な場合があります。

<http://support.novell.com/techcenter/psdb/44ab155e3202595389c101e6cf7e20f2.html>

第 7 章 Developer for System z の開始

このタスクについて

Developer for System z は、Windows デスクトップ環境またはコマンド行インターフェースから、以下のように開始することができます。

- Windows の「スタート」メニューから IBM Rational Developer for System z を開始するには、「スタート」->「すべてのプログラム」->「[package group name]」->「IBM Rational Developer for System z」->「IBM Rational Developer for System z」をクリックします。
- Linux システム上で IBM Rational Developer for System z を開始するには、ご使用のデスクトップ環境のアプリケーションのショートカット・メニューで「IBM Rational Developer for System z」ショートカットをクリックします。

•

Windows

Developer for System z をコマンド行から開始するには、<product install directory>%eclipse.exe と入力します。

•

Linux

Developer for System z をコマンド行から開始するには、<product install directory>/eclipse と入力します。

第 8 章 インストール済みパッケージの変更

このタスクについて

IBM Installation Manager の「パッケージの変更」を使用すると、フィーチャーを追加または除去することによって、インストール済みパッケージの内容を変更できます。この機能は、IBM Installation Manager を使用してインストールされたパッケージでのみ使用可能です。

注: インストール済み環境を変更するために、元のインストール・メディアおよび更新メディアへのアクセスが必要になることがあります。詳しくは、*Installation Manager* ヘルプ を参照してください。

注: 変更する前に、Installation Manager を使用してインストールされたすべてのプログラムをクローズしてください。

注: Eclipse ロケーションまたは JVM を変更することはできません。

インストール済みパッケージを変更するには、以下の手順を行います。

1. Installation Manager のメインパネルから、「パッケージの変更」アイコンをクリックします。
2. 「パッケージの変更」パネルで、変更するパッケージが入ったパッケージ・グループを選択します。インストールされているパッケージを判別するためにヘルプが必要な場合は、「キャンセル」をクリックし、「ファイル」->「インストール済みパッケージの表示」をクリックします。表示されるページに、システムにインストール済みのパッケージとパッケージ・グループが示されます。準備が整ったら、「パッケージの変更」を再びクリックし、パッケージ・グループを選択して、先に進むために「次へ」をクリックします。
3. 「言語」パネルで、追加または除去する言語を選択または選択解除し、「次へ」をクリックします。
4. 「フィーチャー」パネルで、現在インストールされているフィーチャーが事前選択されています。インストールする追加フィーチャーを選択するか、除去するインストール済みフィーチャーを選択解除します。選択が終了したら、「次へ」をクリックして先に進みます。
5. インストール済み環境の変更を開始する前に、「要約」パネルで選択項目を確認します。前のパネルで選択した項目を変更する場合は、「戻る」をクリックして変更します。選択項目が適切である場合は、「変更」をクリックして、指定した変更を行います。変更プロセスが開始され、進行標識にプロセスが完了したパーセンテージが示されます。
6. 「完了」ページに結果が表示されます。
7. 「ログ・ファイルの表示 (View Log File)」をクリックして、全インストール・ログを表示します。

第 9 章 インストール済みパッケージの更新

このタスクについて

IBM Installation Manager を使用して、Installation Manager によってインストールされたパッケージの製品更新および新規フィーチャーをインストールできます。

デフォルトでは、システムからアクセス可能なローカル更新リポジトリまたはネットワーク更新リポジトリをリポジトリ設定が指している場合を除き、更新をインストールするにはインターネット・アクセスが必要です。詳しくは、*Installation Manager* ヘルプ を参照してください。

注: 更新する前に、Installation Manager を使用してインストールされたすべてのプログラムをクローズしてください。

パッケージ更新を検索してインストールするには、以下の手順を行います。

1. 特定のリポジトリ、例えば、イントラネット内の HTTP Web サーバー上に保管されているリポジトリから更新をインストールする場合は、先に進む前に、Installation Manager 設定でリポジトリ・ロケーションを指定する必要があります。Installation Manager で更新のインターネット検索を行うときは、このステップを実行する必要はありません。

注: Installation Manager 設定でリポジトリの指定を行った場合、Installation Manager は、指定されたりポジトリの検索に加えて、更新のインターネット検索もやはり行います。Installation Manager で更新の検索を行いたくなければ、「ファイル」->「設定」と進み、「リポジトリ」パネル下部にある「インストール中および更新中のサービス・リポジトリの検索」チェック・ボックスを選択解除します。こうすると、Installation Manager に対して、インターネットで検索を行わずに、設定で指定されたりポジトリでのみ検索するように指示することになります。

2. Installation Manager のメインパネルから、「更新」をクリックします。
3. 「パッケージの更新」パネルで、変更するパッケージが入ったパッケージ・グループを選択します。インストールされているパッケージを判別するためにヘルプが必要な場合は、「キャンセル」をクリックし、「ファイル」->「インストール済みパッケージの表示」をクリックします。表示されるページに、システムにインストール済みのパッケージとパッケージ・グループが示されます。すべてのインストール済みパッケージの更新の確認を行う場合は、「すべて更新」チェック・ボックスを選択します。「次へ」をクリックして先に進みます。
4. Installation Manager は、インストール済みパッケージに使用可能な更新を検索します。次のパネルに、検出された選択可能な更新のリストが表示されます。
5. デフォルトでは、推奨される更新だけが表示されます。パッケージのすべての更新を表示する場合は、「すべて表示」をクリックします。更新は、必要な依存関係が事前選択された状態で表示されます。
6. インストールする更新を選択し、「次へ」をクリックします。

7. 「ライセンス」パネルで、選択した更新のご使用条件をお読みください。インストールするように選択した各更新にご使用条件があります。「ライセンス」パネルの左側にある各パッケージ名をクリックして、そのご使用条件を表示してください。
 - a. すべてのご使用条件に同意する場合は、「**同意する (I accept the terms of the license agreements)**」をクリックします。
 - b. 「次へ」をクリックして先に進みます。
8. 更新のインストールを開始する前に、「要約」パネルで選択項目を確認します。前のパネルで選択した項目を変更する場合は、「戻る」をクリックして変更します。インストールの選択項目が適切である場合は、「更新」をクリックして更新をインストールします。更新のインストールが開始され、進行標識にインストールが完了したパーセンテージが示されます。
9. 「完了」ページに結果が表示されます。
10. 「ログ・ファイルの表示 (View Log File)」リンクをクリックして、全インストール・ログを表示します。

第 10 章 Developer for System z のアンインストール

このタスクについて

Installation Manager の「アンインストール」オプションを使用すると、以前に Installation Manager を使用してインストールされたパッケージをアンインストールすることができます。

パッケージをアンインストールするには、そのパッケージのインストールに使用した同一のユーザー・アカウントを使用して、システムにログインする必要があります。

Windows

アンインストール・プロセスを開始するには、以下のいずれかを行います。

- Windows の「プログラムの追加と削除」画面から、「IBM Rational Developer for System z」(パッケージ・グループ名)を選択して、「**削除**」をクリックします。これにより、IBM Installation Manager が起動します。
- Windows の「スタート」メニューから、「**スタート**」->「**すべてのプログラム**」->「**IBM Installation Manager**」->「**IBM Installation Manager**」をクリックします。

注: 非管理者としてインストールした場合は、「**スタート**」->「**すべてのプログラム**」->「**My IBM Installation Manager**」->「**My IBM Installation Manager**」をクリックします。

Linux

以下の手順を実行してアンインストール・プロセスを開始します。

1. 端末ウィンドウを開きます。
2. <Installation Manager install directory>/eclipse ディレクトリーに変更します。(例: /opt/IBM/InstallationManager/eclipse)
3. **./IBMIM** を実行します。

手順

1. Installation Manager を使用してインストールしたすべてのプログラムをクローズします。
2. Installation Manager のメインパネルから、「**アンインストール**」をクリックします。
3. 「**パッケージのアンインストール**」パネルで、アンインストールするパッケージを選択します。「**次へ**」をクリックします。
4. 「**パッケージ**」ページで、アンインストールするパッケージを選択し、「**次へ**」をクリックします。

5. 「要約」パネルで、アンインストールするために選択したパッケージを確認します。何らかの変更を行う場合は、「戻る」をクリックします。アンインストール・プロセスを開始するには、「アンインストール」をクリックします。
6. アンインストールが終了すると、「完了」パネルが表示されて結果が示されます。
7. 「完了」をクリックします。

第 11 章 マイグレーション

WebSphere Developer for zSeries または WebSphere Developer for System z ワークスペースのマイグレーション

このタスクについて

WebSphere® Developer for zSeries® 6.0.1 または WebSphere Developer for System z 7.0 で使用したワークスペースがあり、それを IBM Rational Developer for System z バージョン 8.5 で使用するためにマイグレーションしたい場合は、以下の手順に従ってください。

1. IBM Rational Developer for System z バージョン 8.5 をインストールします。
2. マイグレーションするワークスペースの名前を指定して、Rational Developer for System z を開始します。古いワークスペースは、古い成果物がすべて新しいワークスペースに存在し、表示されるように自動的にマイグレーションされます。
3. Rational Developer for System z バージョン 7.x ワークスペースがバージョン 8.5 にマイグレーションされます。

注: Developer for System z は、バージョン 7.x または 8.0.x からバージョン 8.5 にアップグレードできません。バージョン 8.5 は、インストール場所を変えれば、Developer for System z のこれまでのすべてのバージョンと共存が可能です。

注: Developer for System z は、Windows ベースのワークスペースから Linux ベースの Developer for System z 8.5 ワークスペースへのマイグレーションをサポートしていません。

付録 A. 追加ソフトウェアのインストール

必要な System z コンポーネントのインストール

ホスト・コードのインストールの手順については、関連する製品のディレクトリーにある以下のインストール構成資料を参照してください。

- RDz85_zOS_SMPE (z/OS システム)
- RDz85Ent_RSE (Linux システム)

IBM TXSeries for Multiplatforms のインストール

このタスクについて

IBM TXSeries for Multiplatforms にはローカル CICS 開発プラットフォームが用意されているため、CICS プログラムの開発が可能です。

IBM TXSeries には専用のインストール資料のセットがあり、製品に同梱のディスクに入っています。

IBM TXSeries for Multiplatforms をインストールするには、以下を行います。

1. *IBM Rational Developer for System z* インストール・ディスク を挿入するか、電子イメージの RDz85_Setup ディレクトリーを開きます。
2. launchpad.exe を実行して、ランチパッド・プログラムを開始します。
3. ランチパッド・ウィンドウの左側にある「オプション・ソフトウェアのインストール」タブをクリックします。
4. 「IBM TXSeries for Multiplatforms v7.1 インストールの起動」をクリックして、インストールを起動します。
5. プロンプトが出されたら、IBM TXSeries for Multiplatforms v7.1 インストール CD を挿入するか、または電子インストール・イメージを含むロケーションを指定します。
6. インストールが開始したら、画面のプロンプトに従ってインストールを実行します。

RSE Server for Multiplatform のインストール

注: RSE Server は、Developer for zEnterprise でのみ使用可能です。

オプションの RSE サーバーのインストールの詳細は、AIX、Linux、Linux on System z、Linux on Power® の *IBM Rational Developer for zEnterprise Server for z/OS and Multiplatforms* インストール・ディスク に含まれている「Developer for System z RSE サーバー インストールおよび構成ガイド」を参照してください。

Power/AIX と Power/Linux を基盤とするオプションの RSE サーバーを IBM Rational Developer for zEnterprise にインストールするための詳細については、

「RSE サーバー・インストール・ガイド: AIX on Power and Linux on Power Systems」(SA88-4566-01) を参照してください。

Rational Team Concert Integration 拡張機能のインストール

Rational Team Concert Integration 拡張機能は、以下の手順を実行することで、Developer for System z のインストール時に一緒にインストールすることができます。

1. 29 ページの『ランチパッド・プログラムの使用』の説明のように、ランチパッドからガイド付きインストールまたはエキスパート・インストールのどちらかを選択してインストールを開始します。
2. Installation Manager が起動して、インストールを開始したときに、「Rational Team Concert - Client for Eclipse IDE」と「Rational Team Concert Integration 拡張機能」が「使用可能なパッケージ」パネルにリストされます。
3. まだ選択されていない場合は、「**Rational Team Concert Integration 拡張機能**」を選択します。
4. 「**Rational Developer for System z**」または「**Rational Team Concert - Client Extension**」のどちらかが選択されていない場合で、選択されていないほうのパッケージをまだインストールしていないときは、それを選択します。

注: デフォルトでは、「**Rational Team Concert - Client Extension**」パッケージのバージョン 4.0 のみが、使用可能なパッケージのリストに表示されます。バージョン 4.0 ではなくバージョン 3.0.1.3 をインストールするには、「すべてのバージョンを表示 (Show All Versions)」というラベルのチェック・ボックスを選択してから、「**Rational Team Concert - Client Extension**」のバージョン 3.0.1.3 パッケージを選択します。

5. 「次へ」をクリックし、「パッケージのインストール」ウィザードのパネルに従って、拡張機能をインストールします。

付録 B. 既知の問題および制限事項

このセクションでは、インストールおよびアンインストールにおける既知の問題と制限事項について説明します。

製品の問題および制限事項の詳細については、*IBM Rational Developer for System z* インストール・ディスク または *IBM Rational Developer for zEnterprise* インストール・ディスク の Documents¥nl¥en¥readme ディレクトリーにある rdz85_releasenotes.html ファイルを参照してください。

付録 C. IBM Packaging Utility

IBM Packaging Utility ソフトウェアを使用して、HTTP または HTTPS 経由で使用可能な Web サーバーに配置できるリポジトリにパッケージをコピーできます。

Packaging Utility ソフトウェアは、IBM Rational Enterprise Deployment ディスクに入っています。Developer for System z および他のパッケージの入ったリポジトリを、HTTP 経由で使用可能な Web サーバーに配置する場合は、Packaging Utility を使用して、それらのパッケージをリポジトリにコピーする必要があります。

このユーティリティを使用して、以下の作業を行うことができます。

- パッケージの新規リポジトリを生成します。
- パッケージを新規リポジトリにコピーします。複数のパッケージを単一リポジトリにコピーして、IBM Installation Manager を使用した製品のインストール元となる共通ロケーションを企業内に作成することができます。
- パッケージをリポジトリから削除します。

IBM Packaging Utility をインストールして使用するための詳細な手順については、Installation Manager のインフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1r5/index.jsp>) を参照してください。『Packaging Utility でのパッケージの管理』というトピック (http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/install/v1r5/topic/com.ibm.cic.auth.ui.doc/topics/c_modes_pu.html) に最新情報があります。

IBM Rational Developer for System z 資料に関する特記事項

© Copyright IBM Corporation 2009, 2012.

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510

東京都中央区日本橋箱崎町19番21号

法務・知的財産

知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

Intellectual Property Dept. for Rational Software
IBM Corporation
5 Technology Park Drive
Westford, MA 01886
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で 사용할 ことができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書はプランニング目的としてのみ記述されています。記述内容は製品が使用可能になる前に変更になる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式

においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。サンプル・プログラムは、現存するままの状態を提供され、いかなる保証条件も適用されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。© Copyright IBM Corp. 2009, 2012.

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標の帰属表示

IBM、IBM ロゴおよび ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

Adobe、Adobe ロゴ、PostScript、PostScript ロゴは、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

Windows は Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。

著作権使用許諾

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。サンプル・プログラムは、現存するままの状態を提供され、いかなる保証条件も適

用されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

商標

IBM、IBM ロゴおよび ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

Intel および Pentium は、Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Microsoft、Windows および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アンインストール, IBM Rational Developer for System z 57
アンインストールと Installation Manager 20
イメージ (電子), 解凍と検査 11
イメージ, 共用ドライブからのインストール 12, 27
イメージ, ワークステーション上のイメージからのインストール 12, 26
インストール, インストール・ディスクから 11
インストール, 共用ドライブ上のイメージから 12, 27
インストール, 計画 11
インストール, サイレント 35
インストール, 対象フィーチャーの決定 12
インストール, 追加ソフトウェア 61
インストール, 必要な System z サーバー・ツール 61
インストール, 変更 53
インストール, ワークステーション上のイメージから 12, 26
インストール, HTTP サーバー上のリポジトリから 12, 28
インストール, Installation Manager 18
インストール作業 25
インストール済みパッケージ, ライセンス情報の表示 44
インストール方式 11
インストール要件, クライアント 3
インストール・ディスク, インストール 11
インストール・リポジトリ 21
オペレーティング・システム
サポート 6
要件 6

[カ行]

開始, IBM Rational Developer for System z 51
解凍と検査, 電子イメージ 11

開発環境, 統合 13
概要, Developer for System z 1
環境, System z 統合開発 13
管理, ライセンス 41
既存の Eclipse IDE, 拡張 23
共用ドライブ, イメージからのインストール 12, 27
共用リソース・ディレクトリー 22
行レベル・コード・カバレッジ 14
クライアント前提条件, IBM Rational Developer for System z 5
クライアント・インストール要件 3
グループ, パッケージ 22
計画とインストール 11
検査と電子イメージ, 解凍 11
コード分析 13
コード・カバレッジ, 行レベル 14
更新, IBM Rational Developer for System z 55
構成, ヘルプの
ヘルプ・コンテンツ, 構成 39

[サ行]

サーバー, インストール 12, 28
サーバー, インストール・パッケージの配置 29
サーバー・ツール, 必須なインストール 61
サイレント, インストール 35
作業, インストール 25
作業, プリインストール 1
作業, ポストインストール 39
サポート
オペレーティング・システム 6
使用可能化, ライセンス 43
制限事項, 既知 63
設定, Installation Manager での設定 22
前提条件
オペレーティング・システム 6
ソフトウェア 6, 8
特権 9
ハードウェア 5
ブラウザー 9
ユーザー特権 9
Acrobat Reader 9
Adobe Acrobat Reader 9
DB2 Enterprise Server Edition 8
TXSeries 8
Web ブラウザー 9

前提条件と IBM Rational Developer for System z, クライアント 5
ソフトウェア
前提条件 6, 8
要件 6, 8
ソフトウェア, 追加インストール 61

[タ行]

ツール, 必要な System z サーバー・ツールのインストール 61
追加ソフトウェア, インストール 61
ディレクトリー, 共用リソース 22
電子イメージ, 解凍と検査 11
トークン・ライセンス 43
統合開発環境 13

[ハ行]

ハードウェア
前提条件 5
要件 5
配置, インストール・パッケージを HTTP サーバーへ 29
パッケージ・グループ 22
必要な System z サーバー・ツール, インストール 61
ファイル・ハンドル, Linux コンピューター上での増加 47
フィーチャー 13
フィーチャー, インストール対象の決定 12
ブラウザー
前提条件 9
プリインストール作業 1
変更, インストール 53
方式, インストール 11
ポストインストール作業 39

[マ行]

メディア要件 3
問題, 既知 63

[ヤ行]

ユーザー特権 9
要件
オペレーティング・システム 6
ソフトウェア 6, 8

要件 (続き)

特権 9

ハードウェア 5

ユーザー特権 9

要件、クライアント・インストール 3

要件、メディア 3

[ラ行]

ライセンス、管理 41

ライセンス情報、表示 44

ライセンスの使用可能化 43

リポジトリ、インストール 21

リポジトリ設定、Installation Manager
での設定 22

A

Acrobat Reader

前提条件 9

Adobe Acrobat Reader

前提条件 9

AIX 開発ツール、C/C++ 13

C

CARMA 16

COBOL for Windows 13

COBOL 開発ツール、AIX 13

Common Access Repository Manager
(CARMA) 16

C/C++ 開発、AIX 13

C/C++ 開発、Linux 13

D

DB2 Enterprise Server Edition

前提条件 8

Developer for System z、概要 1

E

Eclipse IDE、既存の拡張 23

F

Fault Analyzer 16

H

HTTP サーバー、インストール・パッケー
ジの配置 29

HTTP サーバー、リポジトリからのイン
ストール 12, 28

I

IDE、既存の Eclipse の拡張 23

Installation Manager 17

Installation Manager、アンインストール
20

Installation Manager、インストール 18

Installation Manager、開始 20

Installation Manager、リポジトリ設定
22

L

Linux 開発ツール、C/C++ 13

Linux コンピューター、ファイル・ハンド
ルの増加 47

P

Packaging Utility 65

PL/I for Windows 13

R

Rational Developer for System z、アンイ
ンストール 57

Rational Developer for System z、開始
51

Rational Developer for System z、クライ
アント前提条件 5

Rational Developer for System z、更新
55

Rational Team Concert for Integration 拡張
機能、インストール 62

S

SCLM Developer Toolkit 14

T

Toolkit、SCLM Developer 14

TXSeries
前提条件 8

W

Web ブラウザー

前提条件 9



Printed in Japan

GI88-4129-06



日本アイ・ビー・エム株式会社

〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21